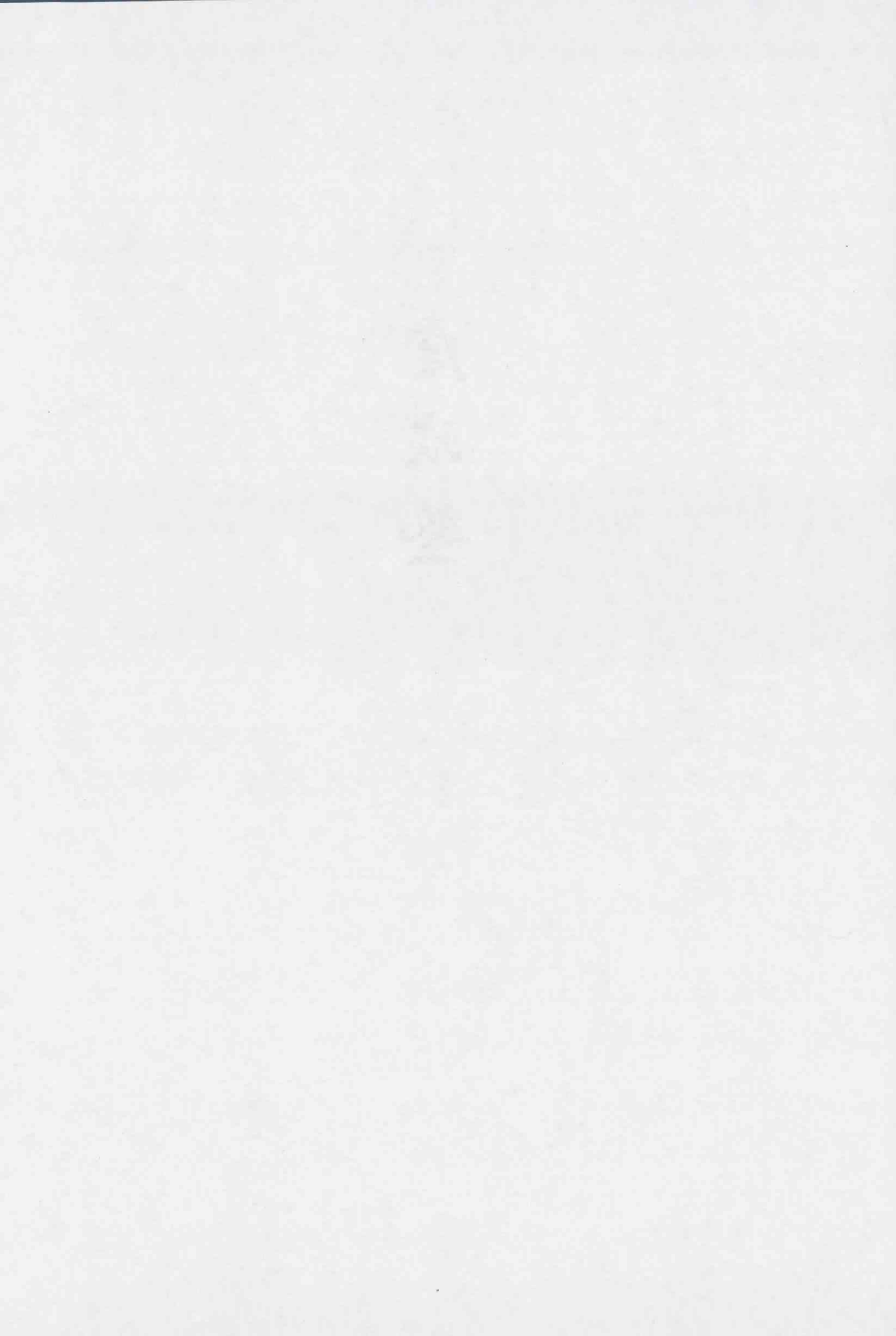


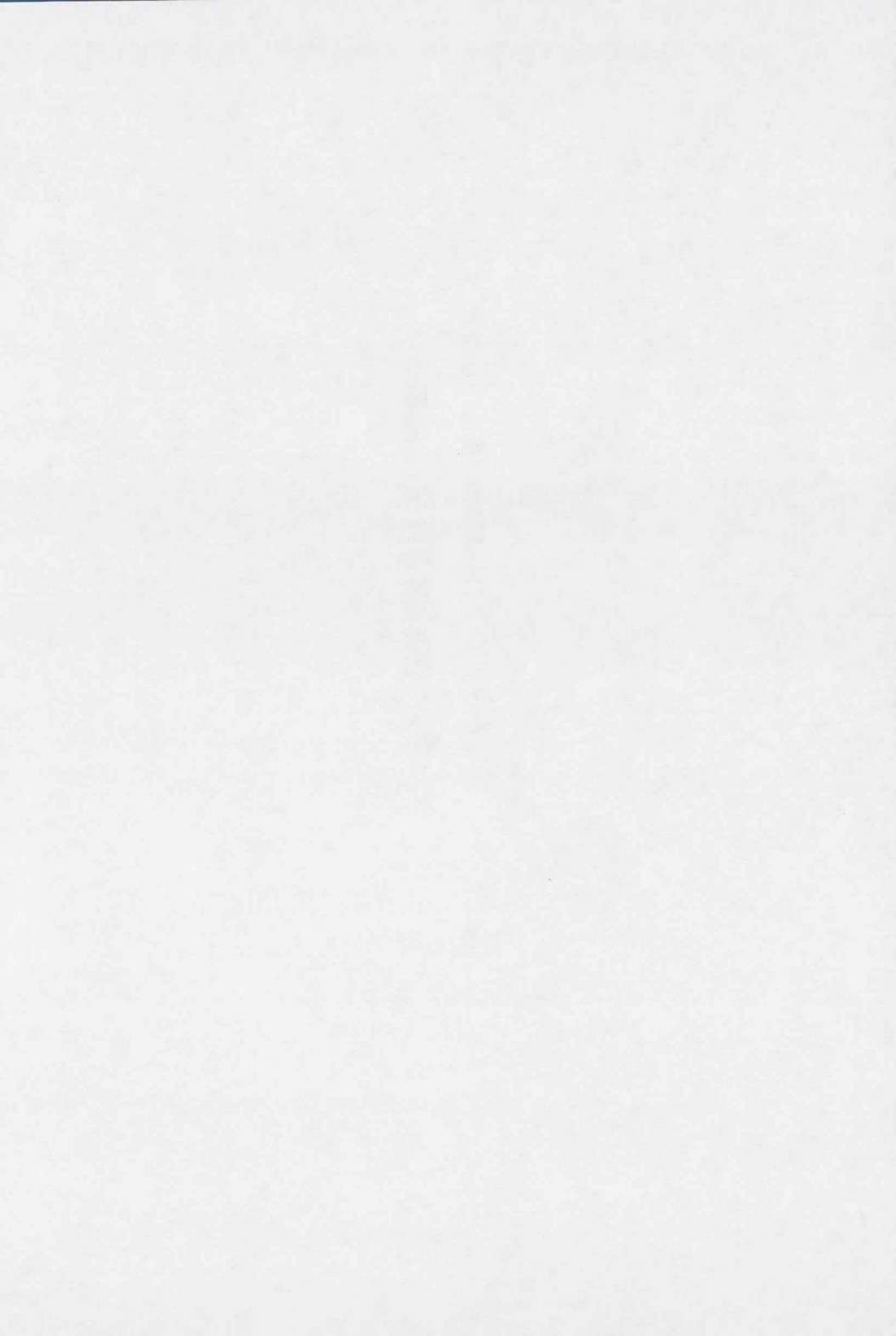
產政塾

VIII

產政塾



この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである



目次

●産政塾誌の発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会

●人生お気軽に！行こう！！

中部電力労働組合 有賀文昭

●「思うままに」

トヨタ車体株式会社 伊藤賢一

●ファッション・文化からみた若年層、そして個の時代の尊重へ

松坂屋労働組合 伊藤友博

●変革期に思う

名古屋鉄道株式会社 岩城史憲

●「苦勞を知らない僕たちに明日はあるのか？」

全トヨタ労働組合連合会 植松良太

●ショート・ショート

豊田市役所 粕谷浩二

●明日に向かって

豊田工機労働組合 川村淳一

43

35

29

23

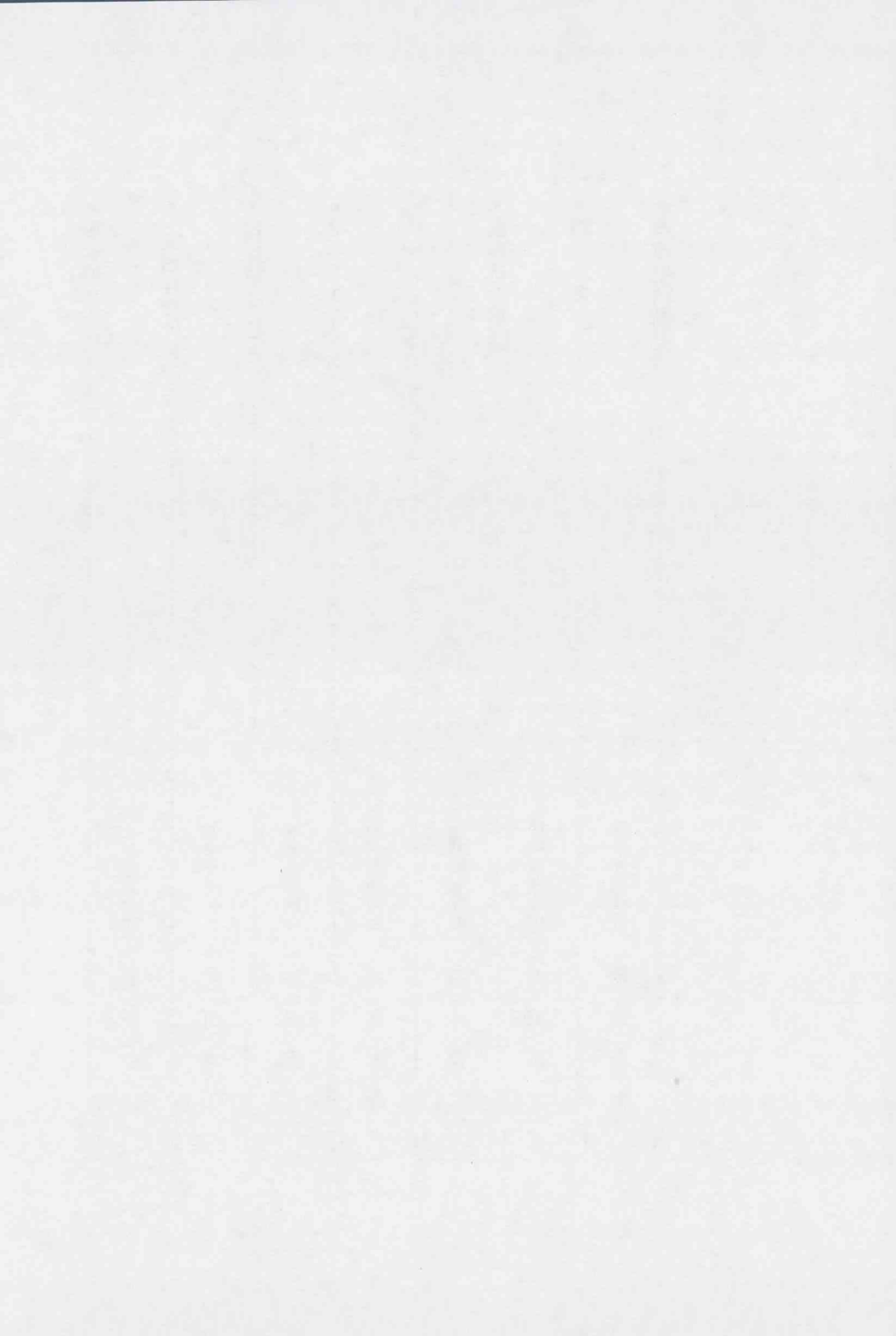
17

9

1

•「夢&今後どう生きるか」	株式会社東海理化	栗栖秀人	51
•「個の時代」に思うこと	中部電力株式会社	佐野弘忠	57
•変わらなきや	アイシン労働組合	杉浦公紀	63
•あまり知られていない私の一面	株式会社デンソー	中條喜之	71
•「娘の一言」	関東自動車工業株式会社	所秀樹	77
•「98年の春に考える」	豊田合成株式会社	丹羽広志	85
•「深夜の独り言―いつの日か息子へ」	トヨタ自動車株式会社	根本恵司	93
•「明るく・楽しく・前向きに!!」	デンソー労働組合	服部健司	101
•我思う	株式会社松坂屋	早川範一	107

● 脱「惑」——道半ば——	アラコ株式会社	船戸正巳	113
● 「変わらなければ」	丸栄労働組合	前田孝広	119
● 『最近思うこと』	トヨタ車体労働組合	前田直人	125
● 2001年、夏	トヨタ自動車労働組合	百瀬和典	133
● バック・トゥ・ザ・フューチャー	アイシン精機株式会社	森本浩二	141
● 産政塾の裏話	財中部産政研	丹羽研次	147
● 時差	財中部産政研	足達廣紀	151
● 産政塾活動記録			153



産政塾Ⅷの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、この度第八期を終えました。

産政塾は、異業種の若者十数名にご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといつても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではなく、参加したメンバーが自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向して体験や教えを請うという活動を通して、学ぼうとするものであります。

また、産政塾は異業種の人達の集りであり、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を超えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーを生み出そうとするものであります。

こうした活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚するという、言うならば自らを磨く道場といったものであります。

今回、産政塾に参加した人達は三十才前後の若者二十二名であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集りになりました。

人間形成の基本の時期は青春期であるといわれておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいといえます。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もできつつある。精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活動する時期であります。

こうした若者達の集りである産政塾は、約一年間に亘ってお互いが夢を語り、自らの企画によって

その実践に情熱を注ぎ、そしてこの度セミナーを終了いたしました。

このセミナーを通じて、参加者一人一人が新しい次代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第八期生がセミナーを通して得た様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマ」と叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。

また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加してもらうのは限られた人達であります。こうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の人達の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

なお、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ関係各位の皆さんに感謝を申し上げると共に、産政塾および塾生に対して今後共ご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸いであります。



人生お気楽に行こう!!



中部電力労働組合

有 賀 文 昭

〔プロフィール〕

- ありが ふみあき (35歳)
- ・ 1963年 3月14日 静岡県生まれ
 - ・ 1981年 中部電力(株) 入社
畑薙第一水力発電所 配属
 - ・ 1984年 大井川電力センター 発電電課
 - ・ 1991年 静岡電力センター 発電電課
 - ・ 1995年 中部電力労働組合本部執行委員
現在に至る
- 今後の予定
- ・ 2000年職場復帰
 - ・ 2023年定年退職 悠々自適の生活を満喫する。
- <家族> 妻、猫×2
- <趣味> モータースポーツ観戦、ツーリング
(最近はさっぱり行ってませんが)
- <目標> 極楽とんぼと呼ばれるようになる

一、プロローグ

なぜ？、なぜ？私は今こんなことをしているのだろうか？。なぜこんな原稿を書いているのだろうか？。

確か十七年くらい前に某電力会社に入社した時は、水力発電所に配属され発電所の運転や巡視をしていたはずだ。そうだ！その数年後には転勤して発電所を離れる事になったんだ。ただ、その後の仕事も発電所の定期点検や請負工事の発注なんかやったりしていたはずなのに。私の仕事は、現場に出向いて自分の手が油まみれなるような仕事をしていたはずなのに。

そう言えば、ここ二、三年の間にずいぶん体が重くなってしまったんだ。そう、はつきり言って体重が一〇キロも増えてしまったのだ。昔は、人前で裸になるのが平気な体型だったのに、今では見るも無残なおやじ体型になってしまっている。んっ、待てよただ単に歳を取っただけなのか？いやそんな事はないはずだ！。

よく考えるんだ。ゆっくりと、冷静に、落ち着いて思い出そう、なぜこんな原稿を書く羽目になってしまったのかを、でも、どこまで記憶を遡ればいいのだろうか？：

二、高校入試

そうだ、あれは中学三年のときだ。

進路相談でどんな高校に行きたいのかを先生に聞かれたとき、勉強なんか大嫌いだった私は、あんまり勉強しなくて済むような高校を選ぶうとしていました。

小学校の頃からオートバイや車、飛行機なんかの機械物が好きだった私は自分の好きなものに関係する事が授業として含まれている「工業高校の機械科に行きたい。」と当時の担任に言いました。だけれどその時に担任から言われたのは「今の君の成績では地元の工業高校には行けないよ。もっと勉強しないと無理だよ。」といわれてしまいショックだったのを覚えている。心の中ではそんなに勉強しなけりゃいけないなら、高校進学なんて止めようかなあ、でも今時高校ぐらい出てないと恥ずかしいなあ、なんて考えていたら、担任が「今の成績で入れるとしたら隣の工業高校ぐらいしかないよ、がんばって勉強しなさい。」と言ってきた。なに？「今の成績で入れる」だと、そんな話があるならもっと早く言ってくれよ、それなら、その高校に行くに決まってるじゃん。

という事で、私の人生の中ではじめての難問と思われた進学問題については、あっさりと解決したのだった。

ああー 楽ちゃん楽ちゃん。

三、座右の銘

だんだん思い出してきたぞ！

十七年前に入社して最初に配属になった水力発電所は、超ー山奥（一般的には僻地といわれているところで、一番近くの民家まで車で三十分以上かかるような場所です。）に在ったから、自宅からの通勤なんてできるわけもなく、必然的に寮生活することになりました。

はじめての寮生活で多少の不安はあったものの、先輩たちはやさしく接してくれたし、飯の心配は

一切しなくてよかったので寮生活にはすぐに慣れる事ができて、そこそこ楽しい会社生活を送っていました。

そんなある日、一人の先輩が突然「今度、俺オートバイ買うぞ!」と言い出しました。その先輩とは酒を飲んでいるときによくバイクの話で盛り上がりたけれど、そろそろ結婚も考えていたようだったし、オートバイはそれほど安い買い物ではないから心配になって、私の方から先輩に「オートバイなんて勝手に買っちゃって、彼女にしかられませんか?」と聞いたら、その時の先輩の答えは「うーん、実は俺もそれが心配で彼女に相談したんだ。そのときあいつに『買わずに後悔するくらいだったら、買ってから後悔した方がいじゃない』て言われたんだ。」というものでした。

それを聞いたとき頭の中に、というよりも全身を駆け巡った言葉は「やらずに後悔するくらいだったら、やってから後悔した方が良い」だった。この言葉が異常に強く印象に残り、それからの私の行動の全てにそれが現れるようになりました。

「やらずに後悔するくらいだったら、やってから後悔した方が良い」という考え方は何事にも通用する(例外としては犯罪ぐらいしか思い浮かばない)もので、元々ノー天気で悩み事など滅多になかった当時二十歳そこそこの私の行動を一層加速させたのでした。

例えばオートバイや車を買うとき、それまでだったら欲しい車種の中から懷具合と相談しながらグレードなんかを決めていたのが、「欲しい」だけが優先するようになってしまったり、好きになった女の子に声をかけて振られたり、はたまた、会社生活では、先輩や上司がどうしようもない奴だったりとすると(レベルの低い説教をたれるとか)どうしても我慢できなくて、こっちから指導したくなっ

て口論（簡単に言うとは喧嘩ですな）になつてしまつたりと、やつてから後悔する事の多い生活を送つてきましたが決して暗い人生ではなかつたし、まあ、細かいことで悩まないで済んだことを考えると、どちらかといへば楽しくお氣楽に生きてきたと言えるでしょう。

しかし、今、冷靜になつてこの「やらずに後悔するぐらいだったら、やつてから後悔した方が良い」という言葉の本当の意味を考えてみると、これを実践するという事は、自分のやりたい事について自分の判断で行動するということであり、当然のこととしてその責任も自分にあり、後々言い訳ができない状況を自分で作るということです。

つまりここでの後悔の質というのは、やつた後に失敗して後悔するにしても諦めがつく後悔、言い方を変えれば、あの時あれをやつておけば良かったのにと、後々引きずらなくて済む後悔なのです。先輩の彼女がどこまで考えて、先輩に『買わずに後悔するくらいだったら、買つてから後悔した方がいいじゃない』と言つた（教えた）のかは、今となつてはわからないし、調べる必要も無い事ではあるけれど、実にすばらしい教えたと心の底から感心する今日このごろです。

（今これを読んでいる方の中には、そんな事はないという反論をお持ちの方もいらつしやるでしょうが、あの会話から十五年以上が過ぎた現在でも、私の行動の基本となっています。）

四、壊れる

今から三年前の一月某日、とある先輩に急に呼ばれ（仕事上の関わりが普段はない先輩）人気のない場所に連れて行かれ突然「おまえにいい話があるみたいだぞ、俺からははつきりと言えないが、そ

れなりの人から話があったら快く引き受けた方がいいぞ」と言われました。そんなこと言われたら内容が知りたくなるのが人情というもので、知っているなら教えてよといったら、案外あっさり「組合の専従者なつてほしいという話だ。」といわれてしまい拍子抜けしてしまいました。とりあえず話の中身はよく分かったもので、それなりの人から話がくるのを待つ事にしました。

そして、数日後それなりの人から電話ありました。

私としてはちよつと興味があつたので真剣に考える事にしましたが、何で私なのかよく分からなかつたので「なんで僕に話を持ってきたんですか？」と聞いたら、「いろいろ検討した結果、君に頼む事にしたんだ。」と言われたので、私の方から「僕が断つても次の人がいるんでしょ？」と聞き返したら、「もちろんそれは考えてある。」とさらつと言われてしまい、またしても拍子抜けしてしまいました。が、せっかくのお誘いなのであまり深く考えずに、翌日にはそれなりの人に「引き受けます。」と返事をしてしまいました。

組合での仕事（活動・運動）は、それまでの会社での仕事とは全く違いなかなか覚える事ができなくてちよつと後悔したけれど、自分で決めた事だからそれなりにがんばっていたら、いつのまにか2年が過ぎていました。

そして、最近気がついたのは組合の事務所にいるとき（場合によつては家に帰ってから）いつも怒っている自分がいるのでした。

元々工業高校の機械科といえば学校の中でも、あまり品のよろしくない学科（我が母校だけか？）ではあつたけれど、これほど短気な性格ではなかつたはずなのに、仕事柄（立場上）やりたくてもで

きない事があって、「やらずに後悔するぐらいだったら、やっってから後悔した方が良い」ができて、その我慢が祟って脳みその一部が壊れてしまったみたいです。

そうだ、はつきりと思い出したぞ！脳みそが壊れてしまっているの、思い出すのに時間がかかったけど、私は組合員さんから給料をもらっている専従者なんだ、普通の会社員とは違うんだ！だからこんな原稿を書く羽目になったんだ。

五、エピソード

今回、第八回産政塾の課題（問題提起）『「殻」の外へ踏み出そう』を見たときに、まずはじめに考えたのは、

・なぜ殻の外に踏み出さなければならないのか。

・殻の中にいるという事の安心感は、平凡（刺激を求めない）な日常生活を送っていくためには非常に大切なものではないのか。

といったもので、基本的に他人にとにかく言われるのが嫌いな性分の私は、課題（問題提起）に対して否定的な発想で参加しましたが、せっかくの機会なので前向きな姿勢で取り組み、何らかの答えを見つけようというつもりではいました。

そこで、自分の殻とはいったいどんな物なのか、その人の「殻」と「カラー」はどう違うのか、という駄洒落みたいな事までいろいろな事を考えてみましたが、私のようにブヨブヨの殻しか持っていない人間にとっては、なかなか難しい問題であり明確な答えを出すことはできませんでした。

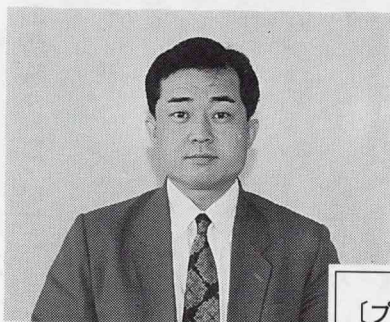
ただ一つだけ言えるとすれば、課題（問題提起）では殻の外に踏み出ることがスタート地点になっていますが、私の周りの状況を見た場合、まず、殻の外にでる必要性を感じているの人間がどれほどいるのか？という、スタート地点に付く以前の問題があると言うことです。つまり、産政塾のようなところに集う人たちとそれ以外の人たちには、日常の問題意識の持ち方（対象）に大きな隔たりがあると思います。

いくら殻の外に踏み出る必要性を説いたとしても、本人にその気がなければ全く無駄な努力であり、結局、その人がそれなりの状況になって初めて真剣に考え始めることなので、他人が理解を求めるのは単なるお節介と受け止められる可能性が大きいと思います。

とまあ、こんなことをいろいろと考えてはみても、世の中なるようにしかならないし、壊れた脳みそも直さなきゃいけないし、まあ、人生お気楽に行こう！

以 上

『思うままに』



トヨタ車体株式会社 人事部

伊 藤 賢 一

〔プロフィール〕

- いとう けんいち (33歳)
- ・ 1964年 愛知県名古屋市生まれ
(12月11日生)
 - ・ 1987年 トヨタ車体(株) 入社
富士松工場工務部日程課に配属
 - ・ 1989年 人事部に異動
教育課、労務課を経て、現在に至る
- 〈家族〉 妻
- 〈趣味〉 年1・2回のスキー、月1・2回の
草サッカー、始めたばかりの陶芸

『はじめに……大人の趣味？について』

『大人の趣味』といっても、決して大きな話をするつもりはない。最近興味を持っていることに關して少し述べてみたいと思う。

三十歳を過ぎ、いつの間にか立派な「オジサン」の域に入ってきたと思う。今から十年前、社会人になって間もない頃に、会社の先輩から『大人の趣味』に關する彼の考え（どうも、誰かの受け売りらしかったが）を聞かされた。曰く、『三十歳を過ぎたら、私の趣味は〇〇ですと、簡単に口にしてはいけない。』とのこと。その真意は、大の大人が自信を持つて趣味というからには、相当の専門性があるべきだという事らしかった。そこで、『趣味』を辞書で調べてみると、『専門家としてでなく、楽しみとしてする事柄』とあるので、そんなに専門性は必要はないとは思ったが、一生を通じて楽しめる事柄があれば素晴らしい事だと感じてから約十年が過ぎた。

プロフィールの欄には迷った末に、十代からやっている二つのスポーツと、三十過ぎて始めた一つの創作活動？を趣味としてあげた。これらについて少し述べてみたい。

『ゲレンデが遠くなる』

二十代の前半、『趣味は？』と問われると、真夏でも『スキーかな。』と答えるほど好きだった時期もある。十代から始め、キャリアだけは実に長い。ところが、いわゆるバッヂテスト（認定試験の類い）にチャレンジしたのは結局一回だけで、しかも不合格のまま２度目のチャレンジはしていない。

今では一シーズンに一・二回も行けば十分という状態で、加齢に伴なう体力の低下と共に、ゲレンデが遠くなつていくような気がする。と、こんなジジ臭いことをいつているとオジサン度が高くなつてしまう。今年は二年ぶりに、愛車のタイヤをスタッドレスに履き替える意気込みがあるので、久し振りにバッヂテストにでも挑戦してみようか、などと考へている。趣味の世界といつても、何か目標を定めて取り組むと長続きするのかなということを感じた。

『長 続 き』

長続きと言へば二つ目の趣味、サッカー。ワールドカップへの出場決定のニュースには、オリンピックで日本代表がブラジルに勝つた時のつぎに興奮を覚えた。とは言つても、日本代表やＪリーグの主な選手名を知っているほどの知識はない。サッカーを自分でプレイすることが好きなのである。

数年前に会社の同僚に誘われたのがきっかけで、草サッカーチームに所属している。現在の所属チーム名は、『O—31FC』（オーバー・サティーワン・フットボール・クラブ）、つまり、チームメンバーは原則として三十一歳以上。いわゆる草サッカーのチームである。メンバーの顔ぶれは、サッカーの経験がある者もいれば、私のように学生時代の体育の授業でやった以外はほとんど経験がないというレベルの者まで様々。地道な、辛い練習などはしない。試合中もラフ・プレーや無理は禁物。毎月一・二回、週末に体を動かし、旨いビールを飲もう！というのがチーム設立の趣旨？だったような気がする。

社内外からいくつかのチームが集まつたリーグの中で、チームの平均年齢はダントツに高い。これ

までの戦績は決して華々しいものではないが、私の場合、いつかチャンスが回ってくれば格好良くゴールを決めたいという気持ち（野望）と、体力維持（ウェイトをこれ以上増やさない）のためにこれまで続けてこられたと思う。スポーツをすることは、体と心のリフレッシュに役立ち、今では大切な趣味になっている。

『作る楽しさ』

さて、三つ目の創作活動とは、具体的には『陶芸教室通い』を始めた。昨年夏のことである。もともと、和・洋にこだわらず、デパートなどの食器売り場を夫婦で見回って回することは嫌いではなかった。『見る』から『作る』への転換であるが、この『作る』が実に面白い。

教室通いを始めてまだ半年。延べ時間にして三十時間程度の経験しかないのに、趣味だというのはお恥ずかしい気もするが、今一番興味があるのがこの『陶芸』なのである。

さて、陶器造りには、いろいろな技法があると思うが、私が気にいつている方法は、練った土の固まりを台の上に乗せ、くるくる回しながら作る『ろくろ』である。

土の固まりを、頭に描いたイメージの器にしていく過程。なかなか思い通りの形になってくれないが、だからこそ面白いとも言える。当たり前前の事ながら、これが手作りの楽しさだとあらためて実感している。

陶芸の魅力に引き込まれている理由は、形を作る面白さもあるが、もう一つは色である。『志野』『黄瀬戸』『織部』など、同じ色を使っても、焼く時のちよつとした条件の違いで、微妙にイメージの違

う色合いになって焼き上がってくる。ある意味では期待を裏切られる訳だが、これがまた面白さの理由であると思う。

半年あまりの経験の中で、これまで作った一つ一つの作品は、茶碗に湯呑み、大小の皿等々、全てがあじわい深く思われ、愛用の食器として毎日使っている。いつかは自宅にも『ろくろ』を持ち込み、生涯の趣味にできればなどと、にわか陶芸家の夢は膨らむのだが……。

『思うままに』

だらだらとタイトル通りの『思うまま』勝手なことを書き連ねてきたが、趣味に代表されるように、人間が何かに興味を持って努力し続けることは、人生を豊かにしてくれる。ただ、継続するためには本人の意思もあるだろうが、その事柄に以下のような条件が必要なのではないかと思う。

①目標が明確で、一つクリアしても次のレベルアップした目標があること（例えば、スキーマのバグテスト合格や、サッカーでゴールを決める、など）、②自分の創意工夫次第では他にない新しいものを生み出せること、③結果はある程度予測可能だが、時には期待以上の成果が得られること（例えば、焼き物づくりにおける造型や色つけの過程と結果、など）である。

『仕事も趣味の一つです』などとは言わないが、興味を持って努力し続ける条件については同じ事が言えると思う。ただ、目先の忙しさ等のために、本来は面白いと感じられるはずのものを、つまらないものにしないために、常に心のゆとり・余裕を持つよう心がけたい。そのためにも、『大人の趣味』の世界を、これからも継続し、深く掘り下げていきたいと思う。

『カラ(殻)って何だろう?』

産政塾のテーマを確認してみると、『殻の外へ踏み出そう』である。当初は、多くの参加者がそうであったように?、職場の上司から『次の産政塾は君にいつてもらうよ。』の一言で、参加することになったということもあり、あまりテーマについては考えてはいなかった。

しかし、会合を重ねる中で、様々な分野の方々の講演を聴き、他の産政塾メンバーの方々とお話をするうちに、自分の『殻』が何と貧弱なものか、またその程度の『殻』がなぜ破れないものかを思い知らされたような気がする。

言い方を変えれば、まだ自分はそんなに立派な『殻』はできあがっていない。もつと大きな『殻』を作る。自分の可能性を延ばす努力をしないと、このままでは大変なことになってしまうぞ、という気持ちにさせられた。少し大袈裟かもしれないが、いわゆる教育効果としては、それほど大きなインパクトがあったと思う。普段の生活の中に身を置いているだけではなかなか気付かないが、異業種・同業他社から来られたメンバーの方々と接してはじめて、自分の『殻』の程度に気付くことができたのだと思う。

おかげさまで、この一年間のプライベートな部分では、いくつかの新しい事柄にチャレンジしている。その一つが先に述べた陶芸教室通いであり、少しづつだが自分にとって良い影響を与えていると思う。

私にとって『殻』とは、決して自己の成功体験に基づく価値観で固めるものではなく、常に何かに

チャレンジし続ける事で、どんどん大きくしていくものであると考える。

『むすび』

入社十年を機に自分自身を見つめ直し、せっかくだから、何かをつかみたいと思って参加させていただいた産政塾。『もつと大きな殻にしていかなければ…』、こういった心構えに至ることができた事は、産政塾のメンバーの方々と知り合いになれた事の次に大きな収穫であったと思います。チャンスを与えて頂いたことに心から感謝します。ありがとうございました。

ファッション・文化からみた若年層、 そして個の時代の尊重へ



松坂屋労働組合

伊藤 友博

〔プロフィール〕

- いとう ともひろ (30歳)
- ・1967年 愛知県生まれ
 - ・1991年 (株)松坂屋入社
名古屋駅店和洋酒・缶詰売場に配属
その後、ハンドバッグ・化粧品売場、ヤングレディズウェア売場に異動
 - ・1996年 松坂屋労働組合名古屋駅支部書記次長(専従)
現在に至る
- 〈家族〉 独身
- 〈モットー〉 会う人みな師匠
- 〈趣味〉 CDの衝動買い、映画鑑賞

98年春夏のパリコレクションでは、とうとう各ブランドが胸の透けて見えるファッションを提案したという。最近のファッションの流れ、97年を振り返って見ても、街ではセクシースタイルで身を包んだティーンエイジャーをよく見かけることができた。ファッションは常に変化している。数年前では常識的に考えられなかったようなデザイン、着こなしが、トレンドとなったりもする。情報が氾濫している現代では、若者がより個性を競い合う手段として、各情報に非常に敏感に反応しており、特にファッション、文化においては、とても刺激的な時代であるといえる。若者の存在意義とは、情報をいかに自分で吸収し、アレンジし、表現するにかかっているといっても過言ではないのではないか。私が大学生の時、大学教授が余談で、「先日、電車の中で、ジーンズの膝の部分が破れたのを気にせず平気でいる若者を見たが、我々にはとても考えられない。」と言っていた。それから数年も経たないうちに、グランジロックに火が付くと共に、穴の開いたジーンズをはきこなす「グランジファッション」が注目されたのは、言うまでもない。現代のファッションとは、何を着るのではなく、服をどう着るかなのである。現在では、ファッションの主導権は、作る側、売る側ではなく、着る側である若者が完全に握っている。ファッション・文化の仕掛け人は、ストリートにいる普通の若者なのである。

以前、ロバートアルトマン監督の「ブレタポルテ」という映画の中で、あるデザイナーが悩んだ末に発表したコレクションが、オールヌードであり、創作の到達点であると絶賛を浴びていたが、これがファッションの行き着く先なのかもしれないと、最近になって考えるようになった。今年の夏に、店頭に透けるファッションが並ぶのか、また、街でそういったファッションを見かけられるのか、今から

楽しみである。

私は、ロックが好きであり、ライブに行くことも多い。私の年齢になると、ライブのオーディエンスの中では高年齢である。しかしライブとは、今の私にとって、若者を知るいい機会でもある。

97年の春先、ある音楽雑誌で、『富士ロックフェスティバル』が開催されることを知った。七月二十六日・二十七日の二日間、富士山麓のスキー場での開催である。参加メンバーのリストを見ると、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、ベック、レイジ・アゲインスト・ザ・マシーン、グリーン・デイ、プロディジーなど、今をときめく米英のバンド名がずらりと並べられていた。早速、友人三名で申し込みをし、七月二十六日をひたすら待った。

七月二十六日は、大型台風が日本列島を直撃しており、富士ロックフェスティバルが開催されるかどうか、非常に心配であつた。現地に到着したのは十時三十分頃であつたが、その時点ではさほど雨足が強くなかつたので、ホツとした。

いよいよ十一時になり、富士ロックフェスティバルが開演した。最初の演奏は、私も初めて聴く「ザンカルチャー・オン・ザ・スキズ」という名のバンドであつたが、一曲目が鳴り出したときの会場の熱気は凄まじいものがあつた。このバンドの演奏を目当てでやって来た人は一人もいない？ はずであるのにもかかわらず、である。本日の大トリである、レッド・ホット・チリ・ペッパーズの演奏が始まるまで、まだ八時間もあるというのに、激しい人の津波ができ、私たちも津波にのまれてしま

い、何度も友人からはぐれる寸前であつた。また、あまりの人波に、前の方が将棋倒しにあい、押しつぶされた人々を助けるために、演奏を何度も中断していた。

次第に雨足が強くなり、豪雨へと変わっていった。また、強風も我々を脅かした。サマーキャンプ、サード・アイ・ブラインド、ハイロウズ、フー・ファイターズと出てくるバンドに対する盛り上がりは、切れ目なく続いた。ものすごい熱気であつた。私たちは体力の消耗を感じ、人波に巻き込まれることのないように、しばらくの間、後ろの方で見ることにした。

夕刻すぎ、雨足が一層強まってきたが、レイジ・アゲインスト・ザ・マシーンが出てきたときは強烈な盛り上がりを見せた。会場は、混沌の渦へと突入し、日本中で一番危険な状態であり、大雨洪水波浪警報どころではなかつた。全ての人々が押し合いへし合いをして、特攻隊が人波の中へ、身を投げ出して飛び込んでいく、といったすさまじい光景であつた。湯気が会場内に立ちこめていた。

いよいよレッド・ホット・チリ・ペッパーズが登場したとき、オーディエンスのボルテージが最高潮に達したときでもあつた。同時に天候は最不調に達していた。野外に設置された仮設ステージは、強風にさらされ、今にも、照明が落ちてきそうであつた。しかし、オーディエンスは、誰一人傘をさすこともなく、ステージ、会場は、一体と化していた。

第一日目が無事？に終了し、ホテルについたが、衣類には泥が染みついており、スニーカーの色も変色してしまっており、使い物にならなくなってしまうていた。

翌朝、ニュースで富士ロックフェスティバル第二日目の中止を知った。理由は、天候は収まっていたが、昨日の台風による会場のダメージが大きく、修復できないとのことであつた。とても残念で

あつた。

富士ロックフェスティバルは、私にとっていろいろな意味で貴重な体験であつた。現代の若者のパワーを再認識させられた。厳しい天候であつたのにも関わらず、このライブがこれだけ盛り上がったのは、彼らの踏ん張り、パワーであつたと思う。

若年者は、無気力、無関心など、一般的にマイナス表現がされている。しかし、少なくとも富士ロックフェスティバルに集まつた三万人の若年者は違つていた。彼らは、自分の好きなもの、好きなことについては、見向きもせず直進していく。私たちのように、休んだり、計算してペース配分することもない。また、同じ価値観を持った人とのつながりを大切にする。そういった仲間意識は、ものすごく強いと感じた。

「常識」が「常識」ではなくなつてきている。去年売れた商品が今年売れるとは限らない。こういった先が読めず、不安感が広がる時代背景の中で、我々の世代がなすべきことを、労働の観点から考えてみたい。

若年者の失業率は悪化しており、96年の発表によると、五年連続して過去最悪記録を更新している。不景気による、就職難の時代ではあるが、自発的な失業も多いといわれている。自発的な失業の多い理由としては、仕事の口があつても就職したくないとか、雇いたくても仕事に合う人材が見つからないなど、仕事の需給をめぐるミスマッチが挙げられている。つまり、景気が回復しても減らない、構造的失業である。小子化が叫ばれる現代において、構造的失業もからんでくるようであれば、これは

深刻な問題であると受け止めている。

この問題は、就職ではなく就社離れが進んでいるのではないかと思う。社会人になり、一企業に属すれば、当然社内規則があり、守らなければならないルールがある。また、社内に根差した風土があり、文化がある。個を大事にし、個に誇りを持つ世代にとってみると、同じ紺色のスーツに身を包み、同じヘアスタイル、規則正しい生活、諸々の規則、慣習などは、自分自身を見失う瞬間なのかもしれない。彼らにとって、これほど辛いことはないのかもしれない。個の時代が、若年者の自発的失業率を高めていることは間違いないと思う。こういった中で、我々社会人の先輩としてできることは、彼らの個性が十分に発揮できるような環境作りをすることではないかと思う。創造性があり、パワーがある若年の秘める能力が、発揮される前に摘まれてしまうことは、企業にとって、また、日本経済にとってみても大きなマイナスである。若者がリードし、盛り上げてきたファッション、文化は、目まぐるしく変化し、常識といった殻を常に破ってきている。こういった発想、パワーが、先が読めない現代において、必要なのではないか。我々は、彼らの発想、パワーを十分に生かすべく、体制を整えていかなければならないと思う。これから就職する若年者にとっても、企業の中の一人としての就職ではなく、それぞれが輝きを失わず、個性を存分に発揮できる就職であってほしいと思う。個の時代の尊重へ、また、より個を重視した時代へと、ファッション、文化同様、企業内における変化も必要な時代が来ているのではないか。

変革期に思う



名古屋鉄道株式会社

岩城史憲

〔プロフィール〕

- いわき ふみのり (38歳)
- ・ 1959年 静岡県生まれ
 - ・ 1982年 名古屋鉄道(株)入社
 - ・ 1985年 研修期間を経てスポーツ事業部配属
 - ・ 1990年 豊橋鉄道(株)出向
 - ・ 1995年 名古屋鉄道(株)人事部
現在に至る
- 〈家族〉 妻
- 〈趣味〉 ゴルフ、スキー
- 〈夢〉 ホールインワン

一九八九年ベルリンの壁が崩れたのをきっかけに、東欧諸国の社会主義体制があつというまに崩壊し、世界はポスト冷戦構造の時代となった。日本においても、九十年代には、自民党の政権交代、ブル景気の崩壊による土地神話の消滅や莫大不良債権の発生、日本型雇用慣行の行き詰まり、金融機関の破綻、日本人を震撼させたオウム真理教事件など、今まで考えられなかったようなことが起つた。まさしく戦後体制から新しい時代になる変革期なんだということを実感する。

そんな中、新しい時代を模索するにあたつて、こんなことでいいのかと、一国民として疑問に思っていることを書いてみたいと思う。

政治不信と市民意識

五〇パーセントを切る選挙で選ばれた国会議員は、はたして国民を代表するといえるのだろうか。選挙の低投票率は、代議員制度の根本にかかわる問題だと思うが、選挙が終わるとあまり話題にならない。

政界の五十五年体制が崩壊し、細川、羽田、村山、橋本政権と目まぐるしく日本の総責任者たる内閣総理大臣が変わつた。二大政党化を目指した選挙制度改革も政党の離合集散がまだ続いており混沌としているのが現状。自民党、日本新党、さきがけ、新生党、新進党、民主党、太陽党、フロムファイブ、国民の声（ちよつとふざけてませんか?）、社会党、民政党、社民党、自由党等々、今ある政党はどれかわかりますか。また、当選時の所属政党から知らないうちに別政党に移籍する議員も多い。万博反対で当選した議員が万博決定後、態度を豹変する無節操ぶり。これでは、どの政党にまた、誰

に投票したらいいのかわからない。

一方、選挙権を行使する私たちの方にも問題がないだろうか。そもそも現在の選挙をみると、本来の個人の自由意志とはかけ離れた、組織票の占める割合が極めて高い。会社、組合、業界団体、宗教団体など自分の所属する団体が推薦する候補者に投票するのである。立候補して名前を初めて知る人も多い。活動実績など推して知るべし。その団体の幹部や一部の人は盛り上がるが、構成員のほとんどは割り当てられた演説会に仕方なく行くだけである。これでは、一人一人の市民意識の高揚にはつながらない。支持もしていない立候補者への署名や政党への入党などナンセンス。選挙においては自分の意思で自分たちの代表を選ぶべきであり、自分たちの選んだ代表者に責任を持ちしっかり監視する。それによって初めて市民意識は高まるし、市民の代表者としての政治家が育つのではないかと思う。

今こそ地方分権

明治維新以来の官僚指導型体制への批判が高まっているが、今までの日本にとって実質的な舵取りをしてきた中央官庁の役割は大変大きかったと思う。鎖国による諸外国との遅れを取り戻すための産業政策や戦後の高度経済成長を促した規格大量生産政策によって国民生活は格段に向上した。

ところが官僚指導型の歪みが最近顕著に現われてきたようだ。無駄な公共事業は多いし、落札価格も民間工事に比べて三割高いらしい。高級官僚の汚職は絶えないし、官官接待で税金が使われる。省庁再編や規制緩和などの行政改革に対しては、利権を守るために必死の理論武装をする。これは今ま

での官僚指導型と世の中の流れがマッチしなくなってきたという証拠だろう。流れは地方分権である。

地方の時代といわれて久しい。全然地方の時代になっていない。それはそれで、権限や税金が中央に集まり過ぎており、身動きとれない。役場に勤めている友人が、「企業は良い人材を集めようと必死で採用活動をしている。ところが役場や市役所だと全く受け身の採用だし、議員や地方有力者などの縁故採用ばかりになってしまっていることが多い。」と言っていた。人材も集まらないようである。

しかし、基本的な社会基盤は整った今求められているのは、全国統一の規格事業ではなく、その地域や町に必要なものを独自の判断で創造することであり、個性的な町づくりをすることではないだろうか。小さい町なのに補助金を使った立派な文化会館が建つ。利用者は少なく、維持費だけがかさむ。まさしく税金の無駄使い。地方に権限と金と人材が集まる仕組みを作り上げ、地方が独自性を発揮できるようにする必要があると思う。

マスコミの無責任報道

今や新聞、テレビ、雑誌などマスコミの力は強大である。情報を仕入れるための手段として、また娯楽のひとつとして日常生活において欠かせないものである。自分で収集しなくても簡単に全国そして全世界の情報を知ることができる。考えてみるとこれはすごいことなんだと思う。仕事がどんなに忙しくても、新聞を手にはない日、テレビを見ない日はまずない。だから企業は高い番組提供料や掲載料を払っても、有効な広告手段として利用するわけである。

これだけ一般大衆に影響力を持っているマスコミであるが、情報を提供する側つまり新聞社やテレ

ビ局、出版社などがそれに対する意識が弱いような気がしてならない。他社との特ダネ競争や購買数・視聴率競争に走り、裏付けがあるのか疑わしい報道をしたり、話題性のある特定の事象をとらえて、さもそれが一般的であるかのごとく表現する。それを見たり聞いたたりした大衆側は信じてしまうのが普通である。

松本サリン事件の時、第一通報者の河野さんを犯人扱いしたのは記憶に新しい。いじめによる事件が発覚した時、学校だけに落度があるように報道したり、阪神大震災の復興対策の時は、対応の遅れた行政だけを非難する。就職協定が廃止されて企業の採用活動が早まる雰囲気を作上げ、学生や学校、企業に焦燥感を与えたのはマスコミによるところが大きい。景気や株価、為替相場の変動に対し極端な表現で不安感をあおったり、企業の犯罪に対し、会社ぐるみの事件という。おそらくその事件にかかわっているのは一部の社員であり、ほとんどの社員は知らない。

報道の自由は守られてしかるべきだと思うが、社会的に影響のある事柄については、もっと責任のある報道を望みたい。

公共マナーの欠如

日本人は、公共マナーがまだ備わっていない。公共の場で、他人に迷惑をかけない、譲り合うなどの基本的な精神が養われていないと思う。欧米人の公共マナーは優れていると思うが、誰もが海外旅行する時代にもかかわらず良いところを学んでこない。

電車での携帯電話、喫茶店での大声、ゴミの投げ捨て、列の割り込み、高速道路での車間距離など

上げれば切りがない。日本は経済的には先進国の仲間入りをしたが、社会的には発展途上国である。外国のレストランで大声をだしている日本人を見ると恥かしくなることがある。

これから国際化、ボーダーレス化は一層進む。外国人との交流も増える。社会的にも胸の張れるように成りたいものである。

思いつくままに書いてきて、まだ他にも言いたいことはありますが、目標の原稿量にほぼ近付いたのでこのくらいにしたいと思います。

最後に、出席率の悪かった私ですが、第八回産政塾のメンバーには今後ともご指導いただきますようお願いしまして、筆を置きたいと思います。

「苦勞を知らない僕たちに 明日はあるのか？」



全トヨタ労働組合連合会

植松良太

〔プロフィール〕

うえまつ りょうた (32歳)

- ・ 1965年 東京都世田谷区生まれ
- ・ 1988年 トヨタ自動車㈱入社
生産管理部・国内企画部に所属
- ・ 1996年 全トヨタ労働組合連合会（専従）
現在に至る
- 〈家族〉 妻(知寿) [97年12月に結婚したて]
- 〈趣味〉 ヤクルトのファン

一、苦勞ができない世代

思うに、われわれの世代は（ちなみに私は昭和四十年生まれの三十二歳です。）高度成長期に生まれ、小学校時代にオイルショックは経験したものの、近所の「らくだや」というスーパーにトイレレットペーパーを買いだめに走った記憶がおぼろげにある程度のものであり、基本的に飢えたこともなく、また生命の危険も感じたこともないし、着る服がないということもない。受験戦争と言っても腹が減るわけではなく、いわば人生の大半を平和な時代、ぬるま湯の中で生きてきている。

「苦勞した分だけたくましくなる」と言われ、また「苦勞は買ってでもしろ」と言われるのであるが、買いにいける程度の苦勞はろくなものではなく、やっぱり苦勞知らずの世代である。

一方、感覚的ではあるが、戦争を知っている世代とその子供の世代、つまり今現在五十歳を超える方々は、生命の危険や飢えを乗り越え、戦後日本をつくりあげてきた、筋金入りの「苦勞人」たちであり、その実績（現在の日本の繁栄）をみてもやはり、「苦勞した分だけたくましくなる」は正解であるようである。

そのような方々に対して私は、ぬぐいようのないコンプレックスを感じざるをえないし、殴られるかもしれないが、ある意味うらやましく思う。正直、苦勞ではとてもかなわない。

二、初代は強く、二代目はこける

思うに、世代にしても、企業にしても、あるいは労働組合などの組織にしても、いわゆる「初代」は、非常に強いケースが多い。逆にいうと「二代目」でこけることが多いのである。

あたりまえだが、「初代」は全てを自らがつくりあげてきた人であり、自分自身で考え、成功してきた人である。

最初からつくりあげるといふ作業は、非常な苦勞を伴うが、一方でえもいわれぬ達成感を得ることができる。そしてそれが自信につながり、さらに活力を再生産するという「活気に満ちた状況」をつくり出す。「初代」は苦勞・決断・達成感・自信・活力をローリングして、その地位を不動のものとしていき、しっかりとした形にしていくのである。

一方、初代でない人々は、「初代」のカリスマの下で、それに従うことを活力とし、安心感を持って活動を進める。そして多分、有能な「初代」であればあるほど、それに忠実かつ強固な組織がつくられ、力を發揮して發展していく。そして多分、派閥争いもない。

しかし、その組織は、往々にして、自ら決定するという機能を失うことになる。考えなくても、「初代」が活動の基準を決めてくれるからである。そしてふと気がつくとき、「初代」なくしては成立しない状況をつくりあげる。その組織の長たる「初代」以外は全員、「決める」ことができない人たちに

なってしまうのである。

そのような状況では、「初代」が元気なうちは、活力に満ちた組織として活動をするが、「初代」がいなくなった瞬間、機能を停止する。その後、何とかして活力を維持しなければと、初めて自分で一生懸命考える。そして方針を決めようとするが、決め方を知らずに混乱するのである。その中で、ケースによっては、皆が自己に目覚め、初めて派閥争いが始まり、仲まで悪くなってしまうことも想定できる。

三、では、どうすればいいのだろうか

では、不幸にして「二代目」以降になってしまった場合、どうすれば良いのであろうか。

正直いうと、ある程度の混乱と衰退はやむをえない、と考える。衰退すれば苦勞が増えて、その結果、また上昇する。この周期はやはり厳然としてあるのである。しかし、「落ちるところまで落ちて、また不幸になって苦勞をすれば、いつかまたよみがえる」では、余りにもさびしいので、やはり何か妙案はないか考えなくてはならない。如何に「初代」の殻を破るか、がポイントである。

「障子を開けてみよ。外は広いぞ」と言ったのは、われらが豊田佐吉であるが、やはりまずは、外

を見て刺激・ストレスを受けるといふことを思いつく。

例えばわれわれの世代は、平和な日本の中で人生を謳歌しており、誰かに征服されるというような大きな価値観の変化に出会ったことがないし、その脅威に脅えることもなかった。でも、もし仮にどこかの国に征服されたら、色々と活気に満ちてくること請け合いである。

しかし、その際に留意しなくてはならないことは、すべて征服されて、死に絶えることは避けなくてはいけないということである。いくら活気に満ちていても、昔の自分が全く残っていないなら、それはすでに全く別のものである。いわゆる「守るべきものは守る」という姿勢が大切であり、「何を守るべきか」について、的確に判断することが生死を分けることになる。自分の中に、うまく「外」をつくる必要があると思う。

そういえば、産政塾の会合で、とりとめのない話をしているときは皆いい人であるが、一旦、自分の仕事の領域に話が至ると、顔が急変する、というケースはよく見られた。やはり、外から見ただけではわからないが、皆、無意識の内にその組織にすっかりと染まっていて、それぞれの領域を守っているんだなあ、ということを知るだけでも刺激になるし面白いものだったと思う。（自分が染まっていることもよくわかったのであるが。）

四、でも、やっぱり不安だ

というわけで、いろいろ考えているわけだが、やはり、自分に染み付いた「苦勞知らず」の體質は、なかなか拭い去れるものではない。

アジア諸国も今、經濟が大混乱して大変な思いをしているが、これを克服したあとは、しっかりと構造改革された、強固な体制となり、苦勞に相応しい繁榮があると思う。日本の金融機関にしても、役所にしても、仮に今叫ばれる改革の波に正面からぶつかれば、その後には、新しい世界が必ず開ける。

日本全体も、「初代」の繁榮が終わりつつある今が、苦勞のしどきだと思うし、日本人として、やはり、皆が苦勞しているときは、乗り遅れずにしっかりと苦勞したいものである。ここで乗り遅れたら、取り返しのつかないことになりそうなので、混沌をチャンスと考え、前向きに「苦勞したい」と考える今日このごろである。

（でもやはり日本人なので、なんとなく、自ら苦勞するのではなく、外からの力で苦勞せざるをえなくなるという姿しか思い浮かばないけど。）

ショート・ショート



豊田市役所 総務部 人事管理室

粕谷 浩二

〔プロフィール〕

かすや こうじ (36歳)

- ・ 1961年 4月14日 豊田市生まれ
- ・ 1984年 4月1日 豊田市役所入庁

総務部 電子計算課に配属

アプリケーションプログラム、教育などを担当

(ほとんど公務員らしくなかった)

- ・ 1994年 4月1日 総務部 人事管理室に異動
職員採用、パートの労務管理などを担当

(まがりなりにも公務員らしくなった)

〈家族〉 奥様(35歳)、長女(9歳)、
長男(5歳)、次男(4歳)

〈趣味〉 野球をはじめスポーツ全般、読書

〈目標〉 住宅ローン完済

まえがき

平成九年十一月二十七日に行なわれた、第八期産政塾最終回において私たちメンバーに課せられたレポートであるが、提出期限が平成十年一月二十三日であり、二ヶ月近く猶予があるので高をくつていたところ、正月気分も抜けて気がついてみると、期限まであと数日しか残っていない今日の時点で構想すらまとまっていらない現状である。

文才のない私が四〇〇〇字という膨大な文字数を築き上げるためにとる手法として、中学高校時代に読みふけた星新一氏の作風をまねて、ショート・ショート風にランダムにトピックスを書き連ねていくこととする。

年金のはなし

いきなりかたい話で恐縮であるが、厚生省は昨年十二月に開催された年金審議会において「二十一世紀の年金を選択する―年金改革・五つの選択肢―」を提示した。公的年金の制度は誤解されがちなので整理しておく、自分の掛けてきた年金総額を将来分割して受け取れるのではなく、ある時代をとらえて世代と世代のたすけ合いの考え方に基づくものであり、平たく言えば、労働している者（加入者）全体で高齢者（受給権者）を養っているという図式であり、年齢構成、掛金によって将来自分が受け取れる受給額は変わってくるのである。

昨今の少子化と高齢化の影響で今後人口ピラミッドは大きく形を変えることとなり、そうなる前に

次期の年金制度改正にむけて国民に議論してもらおうというのが主旨である。

現行給付水準を維持するために、保険料率を上げて労働力人口により負担を強いる案から、保険料率を現行水準にとどめ給付額を減少させる、または支給開始年齢をさらに引き上げる（近い将来段階的に六十五歳まで支給開始年齢が引き上げられることは決まっている）案、さらには公的年金制度の廃止案までも提示されている。また、今年の四月から失業給付と年金の併給調整も始まり、サラリーマンの妻は掛金免除（国民年金三号制度）という特典もとやかく言われており、憂慮すべき問題である。

いずれにしても原資がなければ払えないということであるが、現行でも年金滞納者のうち半分は収入面などの事情のある者であるが、残りの半分は年金制度自体への不信感から掛金を納入しないという確信犯であるという報告もあり、次世代の公的年金の在り方については、一人ひとりが自分の問題としてとらえるべきことである。

さて、K氏にはこどもが三人いる。ひと昔前なら少ない方であったが、今ではむしろ多いほうである。公的年金制度が確立する前には、こどもがリタイヤした親を扶養するのは儒教思想を引っ張りだすまでもなく育ててもらった恩からしても当然であり、ごくごく自然なことであった。それが二回の大きな戦争を経験し、家長制度が崩壊し、高度経済成長から核家族化が進み、社会全体で高齢者を扶養する現行の年金制度となってきた。

親族に恵まれなかった人たちも安心して老後を暮らせるという点では素晴らしいシステムだと認めるのだが、伝統的な美德である直系尊属への孝行心が薄らいでいるような気がする。それが少子化の

菌止めや道徳心の回復に直結するとは明言できないが、こどもを三人育て上げれば、やはりそのこどもたちから恩恵を受けるようなシステムを考慮すべきだとK氏は思う。ただし、親としての義務を果たさない者もあるので、こどもの方から扶養したい対象を選択する権利についても議論が必要であるかもしれない。

保険のはなし

昨年健康保険法が改正され九月から医療費の患者負担が増大した。サラリーマンの医療費本人負担が一割から二割に引き上げられ、薬剤負担も別途加算されることとなった。これにより、サラリーマンの医療費負担は平均二・四倍になった。公的年金のところでもふれたが、原資がなければ払えないということであるが、医療機関による薬づけや水増し請求のチェックをはじめ、診療報酬体系や薬価基準制度の見直しを含め、医療保険財政の抜本的な改正が必要である。

K氏はこれまで、市販のかぜ薬を購入するよりは時として安上がりであることと、より安心を求めて医療機関の診療を受けていた。昨年九月以降医療費の増大を痛感し、体調不良時に安心料としての医療機関の診療を少しためらうようになってきた。

ただこのことは、自己負担（支出）の増加をおさえるという他動的要因からではあるが、食生活を含めた日常生活、自己の健康管理を見直すよい機会であるともいえよう。

また、昨年は介護保険法という新たな保険法も成立した。制度の概要としては、四十歳以上の国民からの保険料などをもとに高齢者に介護サービスを提供するもので、原則として六十五歳以上の高齢

者は要介護の認定ランクに応じて介護サービスが受けられる仕組みである。これにより二〇〇〇年四月から年金、医療、労働（失業給付）に次ぐ四番目の社会保険制度が発足することとなった。

K氏は今三十六歳である。介護保険法のスタート時にはまだ四十歳に到達していないが、すぐに介護対象年齢まで二十五年ずっと保険料を徴収される立場になるのである。来たるべき二十一世紀には急速な高齢化が進み、医療の進歩もあり、介護保険の対象となる高齢者が増大するのは明白である。しかし、初年度の保険料は一人あたり月額平均で二、五〇〇円となる見込みであるが、市町村の人件費、事務費の増を考えたとき、はたして制度を新設する必要があったのかどうか疑問視するむきもあり、現行の福祉施策の枠の中で施設整備やホームヘルパーの人材育成を望む声もあった。

税金のはなし

昨年四月消費税が当初の三%から五%に引き上げられた。政府のふところは赤字であるのでやむをえないという論法であったが、周知のごとく歳出の削減を含めた行政改革は遅々として進まない中で見きり発進であった。あおりで昨年四月以降の新車販売台数は減少したようであるし、全体に消費意欲は抑制され、長期不況からいまだ脱却できないでいる。そうした中で橋本総理は消費拡大のため、赤字国債発行の禁をおかし特別減税を実施しようとしている。

K氏はサラリーマンであり、住宅ローン返済中である。税金をまけてもらえるのはありがたいが、この低金利の時代に所得が増えたり、還付金があれば、消費や貯蓄にまわすより高利子の借金の返済にあてるのが人情であり、住宅ローン完済が当面の目標であるK氏もそうするであろう。結果として

消費が拡大して景気回復に直結するとは考えにくい。また、K氏はパートの労務管理を担当しているが、賃金計算に特別減税の仕組みを取り入れるためプログラム変更が必要になり苦勞することになり、日本全国でも数多くの者が同じ思いをするであろう。それも新たな雇用需要の創造と考えれば話は別なのだが。

労働省は女性の社会進出を妨げるものの中に、税の配偶者控除、配偶者特別控除をあげている。家庭を守る女性の保護のため、先にふれた年金の三号制度と税の諸控除があるのだが、これらの金額を見直す、あるいは廃止することをも視野に入れているようだ。

K氏には妻と三人のこどもがいる。未就園児もいるので妻は専業主婦である（労働意欲も？）が、専業主婦の特典がなくなれば、子育てに区切りをつけて働きたすことになる。それは収入減を補うという他動的な意味合いがあり、自発的な社会進出とはほど遠いものである。何より働かざる者食うべからずのような風潮や、家事、育児、地域活動を軽視することは非常に好ましくない。

ただ、本当の意味で意欲のある女性が社会に進出できる、また維持できる環境を整えることが必要であり、少子化を防ぎ、地域で子育てを支援するシステムづくりが急務である。

あ　と　が　き

過日亡くなった作家星新一氏の作品に出会ったのはかれこれ二十年前であるが、着眼点がすばらしく、近未来にありそうなできごとを簡潔にしかもウィットに富んで著わしたもので、いまもって思春期の学生にも素直に楽しめる作品群である。今では十カ国語以上に翻訳され、世界各地で愛読されて

いる。

さて今回のレポートの題材は、せっかく産政塾のメンバーに地方公務員である私が参加していたのであるから、公的な社会事を私なりに産政塾のメンバーに紹介したつもりである。文才の関係で意味不明瞭な点もあるであろうが、一年間のつきあいに免じて容赦いただき、新聞等で各自情報を整理してもらいたい。なお、本文中に登場するK氏は私の本音部分の分身であると考えてさしつかえない。今後とも社会事象には常に気を配り、公的機関にまかせっきりでなく各自で考え、情報収集し、行動し、対策を講じて、悠々自適な老後を迎えたいものである。

以上

明日に向かって



豊田工機労働組合

川 村 淳 一

〔プロフィール〕

かわむら じゅんいち (33歳)

・ 1964年 10月21日 名古屋市生まれ

・ 1987年 豊田工機(株)入社

研削盤設計室に配属

・ 1996年 豊田工機労働組合 (専従)

現在に至る

〈家族〉 妻 (ゆかり)、長女 (江利奈 7歳)、
次女 (阿由弥 4歳)

〈趣味〉 野球観戦 (大のドラゴンズファン)

・ パソコン・ゴルフ

はじめに

時が経つのは早いもので会社に入社して丸つと十一年が過ぎ、中でも労働組合専従としては一年半、二回の春の取り組みを経験した。会社に入社したときは、労働組合の専従執行委員になるなど夢にも思わなかった。ましてや労働組合専従になるまで存在すら知らなかった「産政塾」に入塾し、異業種の仲間と集い、語り合うなど全く想像もしていなかった。そんな自分に「産政塾」というすばらしい場に参加させて頂いたことへ感謝をし、今回卒業にあたり日頃感じていることを個人の意見として書かせて頂きます。

驚き

最近世の中に起こっている出来事で、驚くことが沢山ある。銀行や証券会社の破綻もそうであるが、青少年犯罪にも大変驚かされる。少し前はいじめの問題が大きく取り上げられていたが、最近は刃物を使った事件がかなりたくさん発生したことに大きな驚きを感じている。

なぜこのような問題が起こるのであるうか。それぞれにいろいろな事情があり、はっきりした原因を一つに絞ることはできないと思うが、家庭・社会・学校という面から少し考えてみる。

孤独な世の中

まず、家庭という面で考えてみると、現代の多くの家庭は核家族であり、また、夫婦共稼ぎの家庭

も多くなってきた。加えて家の中では個人個人の部屋があり、家に帰っても家族が顔を合わさな
いで過ぎ去っていることも多いのではないか。そんな状況では家庭でのコミュニケーション、ふれあ
いの時間が少なくなっていることに原因があるのではないか。

次に、子供の遊び方にも問題があるのではないか。現在は、テレビゲームやファミコンなどが急速
に発展し、一人で遊ぶことに不自由を感じなくなってきたと思う。

親も子供が家の中でゲームをして遊んでいれば安心。逆に公園で遊ばせることは非常に不安に思
うのである。

なぜ子供を公園で遊ばせられないかというと、いろいろな犯罪が報道され、子供に関する凶悪な
のが目に付きすぎ、もし自分の子供にも同じようなことになったらどうしようと考えてしまうからで
ある。人は弱いものであるから、ついつい危険から逃れようとするのは自然な気持ちではないか。

自分自身、自宅マンションのすぐ隣に公園があるが、高層マンションの上層階に住んでおり、子供
を一人で遊ばせることに不安を感じる。というのは、マンションの上層階に住んでいると公園で遊ん
でいる子供には全く目が届かず、ましてや子供たちが遊んでいる声も届かないので何か異常があつて
もわからないのである。また、マンションというのは、想像以上に一戸、一戸が閉塞的であり、近所
付き合いが無いものである。同じマンションに住みながらお互いが顔を合わせても、同じマンション
に住んでいるとは気づかない、知らないものである。という中で、近くで子供が危険なことをしてい
たとしても全く無関心、知らないふりをしてしまうのである。

さらに、学校教育を含め、子供を取り巻く大人の問題もあるのではないだろうか。

見ず知らずの子供が公園で明らかに悪いことをしていたとしても、注意できないのである。なぜかという、注意したら逆に反抗され、取り返しをつかないことになるとよく聞くからである。それは、子供たちの中には、使い方を少し間違えれば凶器になるナイフを隠し持ち歩いているという。注意をされて気に障るようなことがあれば、ナイフを取り出し向かってくるかもしれない、という不安な気持ちを持つているのである。注意をした人自身だけではなく、その人の家族、さらには子供にまでも危険が及ぶことがあるとも聞いたことがある。ということで、大人は子供の行動に対して悪いことをしていたとしても無関心でいるしかない状況になっているような気がする。

ナイフというものは危険なものであり、持ち歩くものではないという考えを持っているが、近頃はナイフを持ち歩いている子供が多い、また、学校へも持つて行っていると聞かされ、少々戸惑いを感じる。

少々考え方が古いと言われるかもしれないが、学校というものは勉強するところであり、勉強に必要な道具以外持つて行く必要はないと考えるが、今はそうではないようである。第一、今は学校で持ち物検査をやれないと聞く。なぜだろう。持ち物検査をすることはプライバシーの問題に関わるというが、プライバシーというものは、分別のつく人に対して守られるもので、分別のつかないであろう人に対しては、少々踏み込んでその人を検査することも必要であると思う。検査した結果、異常な行動を起こしている人に対しては、徹底して注意し、更正を促すことが必要であると思う。

持ち物検査も必要であるが、忘れてはならないのは教育の方法である。ナイフの使い道など、遊びの中で教育していくことでもあると思うが、もう少し学校教育の中で取り入れていっても良いのでは

ないか。とも思う。学校ばかりに頼っていてもいけないと思うので、やはり親がしっかりと教育していくことが第一であると思うが。

少し話が飛躍してしまったかも知れないが、大人が見ず知らずの子供を怒れないでいるということ、今も大きく問題となっているいじめがあると思う。周りにいる大人たちが温かい目で注意し合い、気を配っていれば、少しでもいじめが少なくなっているであろう。もっともいじめの問題は家庭でのコミュニケーション不足が原因であると思うが。

いろいろマスコミの報道などでいじめが取り上げられているが、一番気になるのは親がいかに自分の子供の行動を知らない、ということである。いじめの問題でいつも聞くのは、「うちのこに限って」ということである。やはり、家庭内の会話が一番問題になってくるのではないであろうか。日頃から子供と真剣に会話を交わし、それも子供の目を見ていけば、子供は正直であるので、ある程度子供の気持ちかわかるのではないかと思う。

親と子のコミュニケーション

さて、自分自身のことを振り返ってみる。子供に対して無関心であったり、コミュニケーションを取っているだろうか。普段は子供と接する機会が少ないため、ついつい子供のその日の学校や幼稚園での出来事に関心が少なくなっているのでは、と反省させられることがよくある。

また、休みの日に子供と接する時間ができるが、その時に充分遊んであげているかしばしば考えてしまうことがある。

私の場合はまだ子供が小さいこともあり、隠し事はあまりなくいろいろと子供から話をしてくれるので、今のところ安心。しかし、一般的には、もう少し大きくなり、だんだんと親に対する恥じらいが出てくると、話をしてくれなくなるということなので、この先は少し不安である。

だがそんなことを今から心配していても始まらないので、とにかく子供とのコミュニケーションを充分に取れるような環境を作っていきたいと考えている。いつでもコミュニケーションが取れ、悩みなど隠し事がない家庭が一番であり、お互いが助け合って生活するのが家族ではないか。

そのために心掛けていることは、簡単に出来るようなことだがなかなか自分の中に意識を持たないと出来ないことではないかと思っていることで、日頃から子供が話し掛けてきたときはじっくり話を聞くようにし、また、子供に対して学校での出来事などを積極的に聞くようにしている。こういうことの積み重ねがコミュニケーションを円滑にする肥やしになると思っている。

協 力

世の中にはいろいろな家庭があり、それぞれの事情があり、なかなか親と子が充分に話をする時間が取れない人もいるであろう。だが、コミュニケーションの取り方は工夫次第でいろいろあると思うので、やはり各家庭、各個人個人で考え、少しでもお互いの気持ち理解できるように努力をすべきであると思う。やはり、家庭の中でのコミュニケーションが人作り、人の生活に一番大切であると思う。

また、地域、近所付き合い合ひの中でのコミュニケーションも、もう少し活発に行なったほうが良いの

ではないか。しかし、あまりプライバシーに深く踏み込むことは問題であると思うが。例えば、少しでも顔を知っていれば挨拶だけでもすれば、いざというときにはお互いが助け合うことも出来るのではないかと思う。この挨拶がコミュニケーションの始まりであると思うし、明るい社会を作る原点ではないだろうか。

少しでも不安の無い生活を送るために、世の中全体でコミュニケーションについて考え、見直していく必要があると思う。

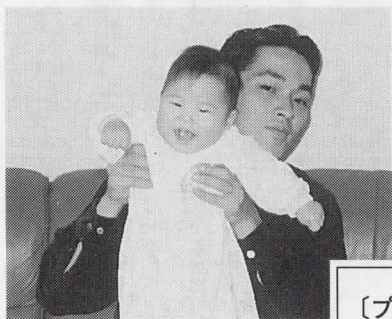
最 後 に

いろいろと偉そうなことを書いてきたが、自分自身この問題に関する専門家でも何でもないので、正しい結論になっていないと思う。

コミュニケーションに関しては、自分自身大いに反省すべき点がある。挨拶一つとってもきちんとできているか。子供の話を充分に聞けているか。すべてについて、日々考え、自分なりに精一杯努力していきたい。

しかし、このコミュニケーションの問題は一人で考えていても全く解決にはならないので、社会全体で考え、明日に向かって明るい社会を築き上げていく必要があると思う。

「夢&今後どう生きるか」



(株)東海理化電機製作所 経理部

栗栖秀人

〔プロフィール〕

- くるす ひでと (29歳)
- ・ 1968年 10月8日 愛知県にて生まれる
 - ・ 1991年 (株)東海理化電機製作所入社
人事部人事課 (のちに人材開発室) 配属
 - ・ 1996年 チャレンジ21プロジェクトへ
 - ・ 1997年 経営企画部企画室へ転部
 - ・ 1998年 経理部経理室へ転部 (現在に至る)
- 〈家族構成〉 妻 (26歳)、長男 (1歳)
- 〈趣味〉 テニス、麻雀
- 〈その他〉 地元青年団にて自警団副団長

一、はじめに

産政塾のレポート提出期限が過ぎてはや二ヶ月以上が過ぎようとしております。

何度も何度も頂いたレポート提出の要求に対し、やっと重い腰をあげた次第であります。

まず、初めに中部産政研の丹羽様はじめ関係者の方々に本件にて多大なるご迷惑と手間をかけさせてしまったことを心から陳謝いたします。

また、産政塾への出席率がかなり低かった点（恐らく塾生の中で最も低いのでは……）についても皆様方に陳謝させて頂く一方で、せっかくの貴重な機会を自ら放棄してしまったことに対し心から反省している次第です。

今この筆を取っているのは、当社の事業年度も変わり（97年度から98年度へ）、外の桜も散りかけた四月のあたまであります。残された提出期限も（もうとくにすぎているが、最終通告か？）本当に残りわずかとなり、テーマも決まらぬまま今パソコンの前でキーボードに向かっている。（テーマが自由というのがまた悩ましい。）

いくら悩んでいても始まらないのでそろそろ筆を取ることにする。今までの自分を振り返り、自己反省する意味を込めて「夢&今後どう生きるか」というテーマで簡単に書かせて頂くことにする。

二、幼少時代の「夢」

よく小学生の時「文集」等で「将来の夢は何ですか？」という質問があったのを覚えている。

ちなみに当時の私の友人達の間で多かったのは、一位に「プロ野球の選手」、二位に「社長」……な感じであった。間違っても「サラリーマン」なんて答えはなかった。（この頃の夢は非常に斬新でスケールが壮大だ。というのもまだ自分に引かれた「レール」というものがなにも無い。自由に「レール」とやらを組み替えることができる。これぞ本当の「夢」かもしれない。）

そんな当時の私の夢は「①プロ野球の選手、②宇宙飛行士、そして③大統領（？）」であった。

①の「プロ野球の選手」については、言うまでもなく当時の少年だったら誰もが抱く「夢」である。③の「大統領」については記憶は定かではないが、恐らく「日本で一番偉い人」になりたいというような意味で書いたのであろう。（目立ちたがりやの私としては、とにかく何でも一番にならないと気が済まなかった。）

そして、私が本気で考えていた「夢」とは②の「宇宙飛行士」になる夢である。この「夢」について少し振り返ってみたい。そもそもこの「夢」を抱ききつかけとなったのは、鹿児島にあるロケット基地へ遊びに行ったときのことである。（鹿児島には私の祖父・母が住んでいた。）なにせ「本物」を一目見た時のその迫力といたら、驚くばかりか一種の興奮さえ覚えたものです。とにかくその目の前にある「ロケット」で「月」やらいろんな「星」やらへ行けると聞けば、とにかく好奇心旺盛な当時の私とすれば「何が何でも俺もロケットに乗って「宇宙旅行に行くんだ。」なんて何の迷いも無く

純粹に考えていました。それからというもの、家にある天体望遠鏡を持ち出しては、とにかく「星」を見ては「星ってどんな形してるんだろう。」とか「星にはどんな人が住んでいるんだろう。」とか想像しては「絶対いつか行ってやるんだ。」なんて本当に本気で考えていたのを思い出す。

三、学生時代

中学・高校・大学とこの頃は本当に多くの「夢」を抱く。いわゆる「極めて現実に近いレベルでの空想の物語である。」きつとその「夢」は自分の置かれた環境、自分の体験、自分の趣味等に基くのであろう。多くの人がその「夢」実現の為に汗を流し、時には涙し、切磋琢磨するのだと思う。そういう意味では人間形成という意味合いでも一番大事な頃の「夢」なのかもしれない。

そういう私もこの頃大きな「夢」を持っていた。(あくまでも私の中での「大きな夢」であるが。)それは私が中学入学した頃から持ち続けた「夢」である。(今でもまだ一部「夢」の残骸は心の中に残っているのだが…)今更ここで書くのも非常に恥ずかしい限りなのだが、私はとにかく「広大な牧場のオーナー」になりたかった。とにかくなりたかった。何がきっかけかは定かではないがおそらくアメリカで遊びにいった際にお世話になった家庭の雰囲気であるとか、いろいろな新聞・雑誌の影響なのであろう。気づいたらそういう「夢」を持っていた。結局大学受験の際に見事に碎け散ることになるのだが。(結局「現実」との狭間に立たされ「現実」を自ら選択することになった。)

ただ今思うのは「夢」は必ずしも達成しなければいけないものなのだろうか？決してそうではないと思う。「夢」を追いかけている時の姿、「希望」に満ち溢れている時の自分自身の姿が一番大事な

のだ。」と私は思う。人生を楽しく生きていく上でのか起爆剤みたいなものではないのだろうか。

三、最近の環境

会社に入ってはや七年が経過した。最近空虚感を覚えることがやたらと増えてきたような気がする。幼い頃持っていた無邪気で壮大な「夢」が「現実」という名の魔物に完全に押し潰されてしまったような気がする。ただ毎日が平々凡々と過ぎていくことに何か慣れてしまっている。

「今の俺の夢は何だろう?」「今、俺は何に向かって生きているんだろう?」たまにふと考えることがある。なんか入社したての頃の「夢」「希望」そして「心の輝き」、「改革」の旗を掲げて「熱き野望」に燃えていた二年前(プロフィールでも紹介しているが、私はちょうど一年と二年前、チャレンジ21プロジェクトという業務プロセスのリエンジニアリングならびに中長期の製品別事業計画立案を目的とした若手十五人程度中心の改革プロジェクトに参加していた。(…もちろん見事に崩壊し、成果の程は今のところ見えていないが…)。その頃の自分自身とは明らかに何かが変わってきている。ここ数ヶ月「夢」とか「希望」とか「やりがい」とかなんかそういったぐいものを全く忘れて仕事をしてきたような気がする。「結局自分はいくまでもサラリーマンなのだ。しかもまだまだ若造なのだ。いくら吠えたところで結局犬の遠吠えにしかならなかったのだ。会社のヒエラルキー構造なんて飛び越えられっこないんだ」、なんて発想にしかならない自分が今ここにいる。今の自分は完全に日々の「現実」をただ漠然と生きているだけになっている。(ただなんとなく朝起きて、8:30に会社に行って、ただなんとなく22:00まで会社について。そしてただなんとなく家に帰って、ビールを飲

んで。そして気づいたら寝ている。振り返ると、最近そんな生活が日々続いているような気がする。）今のままではいけない。なにかを変えなくては。

四、今後どう生きるか

私の好きな言葉に「自由と自己責任」という言葉がある。結局、自分の人生という「ルール」は誰も引いてはくれない。当然だが自分自身で引いていかなければいけないのである。

今回今までを振り返ってみて、もう一度自分自身を変心させなくてはと痛切に感じている。確かに今自分は人生の「分岐点」に立たされているような気がする。今回が自分自身の「ルール」を変える良いチャンスなのかもしれない。もう一度原点に帰っていろいろと見詰め直してみようと思う。

まだ具体的な「夢」「希望」そして「人生の目標」みたいなものは漠然としたものすら浮かんでいないが。きっとポジティブシンキングでいけば近い将来はつきりと見えてくるのだろう。

そろそろ文章も中味がまるでなくなってきた。終わりにしたいと思う。

最後に中部産政研の丹羽様はじめ関係者の方々には本当に感謝して、筆を置かせて頂くこととする。

「個の時代」に思うこと



中部電力株式会社 人事部

佐野 弘 忠

〔プロフィール〕

さの ひろただ (30歳)

- ・ 1967年 愛知県名古屋市生まれ
- ・ 1990年 中部電力株式会社 入社
- ・ 1996年 人事部労務課配属
現在に至る

〈家族〉 妻1人、娘(1歳)1人

〈趣味〉 スキー、キャンプ、
釣り (これから始めます)

〈モットー〉 話せばわかる

服装自由化運動

高校時代に私の通っていた学校の生徒会が「服装自由化運動」なるものを繰り広げたことがあります。『制服というのは画一的で、生徒の自主性を損ねるものである』と、学校に対して、通学する時の服装を自由化するように迫ったのですが、結局学校が「ウチの学校だけが制服を廃止する訳にはいかない」として認めませんでした。当時、私はクラブ活動のために学校に通っていたようなものでしたから、この運動にはそれほど関心を持ちませんでした。

しかし、このところしきりに「個の時代」ということが言われたり、また、社会全体について「横並びの打破」などということが言われるようになり、今になってみると、この生徒会の運動の顛末はこれら現在のキーワードについての当時の風潮をよく表していたような気がして、最近よく思い出します。そして、あれから十数年が経ち、「個性」であるとか「横並び」などに対する意識も（変えていかなければいけないと声高に言われるようになっただけでも）少しは変わったと思う一方で、実態は依然として変わっていない面がかなりあるのではないかと改めて感じます。

ヤンキースタジアム

観光などで、これまでに数度アメリカに行く機会がありましたが一、番心に残っているのは、ニューヨークの高層ビルやグラウンドキャニオンの大自然ではなく、メジャーリーグを観戦したヤンキースタジアムです。スタジアムの雰囲気は日本のそれとは全く異なるものだったからです。

とにかく、それぞれのファンがそれぞれの流儀で試合を楽しんでいました。立ち上がってダンスをしながら応援する人、プラカードにメッセージを書き込んで選手にアピールしている人、試合そっちのけで一緒に観戦している家族と話し続ける人などさまざまです。マイナーリーグのデーゲームだと観客席でバーベキューをしながら観戦する人もいます。

日本の野球観戦はというと、お揃いのメガフォンを打ち振り、お揃いの振り付けで応援し、外野席に座ろうものなら、そうしなければファンではないかのごとくの雰囲気となっています。Ｊリーグの応援にもそれに通じる雰囲気があります。

個と組織

こうした面をみると、日本人にはやはり何か本質的なところで「人と違うことをしない方がいい」という意識が、まだまだ色濃く残っているのではないかと気がします。

そして、最近の日本における経済の低迷、企業の不祥事多発と、それと対照的なアメリカ経済の好調さを考えると、この二つの国の根本的な違いは、良く言われることかも知れませんが、「横並び」意識の有無ひいては、「個」あるいは「個性」の確立の有無があるのではないかと思います。

現在の日本企業（社会）の状況は、組織（社会）を構成する人々が皆同じ方向を向いている集団はやはり弱い面が多分にあるということを改めて実証しています。

こうした組織は、何かの目標が設定され、それに向かってに突っ走っていくときには大変な強さを発揮しますが、最近のように取りまく状況が刻々と変化し、それへの迅速な対応を求められる場合に

は、弱さを露呈します。

また、全体が悪い方向に向いてしまった場合に、それを止める機能が働きません。特に企業の不幸事の多発については、日本の組織が悪い方向に向いてしまった時の怖さを実感します。

そこで、自分や身の回りの現状を考えてみると、極力変えていこうと思つてはいるのですが、まだまだ仕事のやり方をはじめとして、「横並び」の意識を捨ててきれていません。自分の発想の中にも、「皆（あるいは上司が）こういう意見だから自分も」などという気持ちで、まだ現実として残っています。

欧米の企業風土の実際は良くわかりませんが、雑誌に、トップが外国人である日本の大手メーカーの記事が載っていました。このメーカーは業績不振に陥ったことから、その再建に向けてアメリカのメーカー出身の外国人を社長に迎えたのですが、その社長により欧米流の改革が進められました。例えば、経営会議においては、資料や報告書を読み上げるのではなく、資料は事前に良く理解しておくこと、担当外の案件であっても事前に情報収集し、会議の場でどんな意見を述べることを要求したそうです。すなわち「発言しない者は、存在しない者とみなす」ということです。

これにより、会議前になると役員が全く違う部署の担当者呼び出し、資料の説明や解説を求めるといったこれまでにないようなことが急激に増え、その結果、経営会議には緊張感が生れ、さらに役員を支える社員にも経営に対する意識が高まったと言われています。もちろん、良し悪し両面があるのでしょうが、私たち日本の企業に属する者から見るとこれはたいへん新鮮であり、「個」のぶつかり合いが少なくとも組織を活性化させる効果はあることを示していると言えます。

存在価値

さて、それでは、これから私たちは何をすれよいのでしょうか。今でこそ、「個性」「個性」といわれていますが、会社の中ではまだ若手といえる三十歳の私が中学・高校の頃でも、まだ「管理教育」などという言葉が幅をきかせており、その中で育った身としては、いきなり「個性を出せ」と言われてもたいへん困ってしまいます。

私としては、つきなみな表現ですが、「自分の存在価値を高めていく」しかないと思っています。そのためにも、まずは、いつも良い意味での野党的なモノの見方と、発想をとれるようでありたいと思います。その組織の中での常識や多数派の意見は、外から見れば、意外と非常識であったり、おかしいことが結構あるはずですから、それを冷静に見極めていく必要があります。そういう意味においても、今回異業種交流会で知り合ったさまざまな業種の皆さんとは今後も交流を続けて行き、お互いに刺激し合えたらと思います。

次に、そのようなモノの見方をして、ある結論を導き出したら、それがこれまでのやり方とは違うものや、他人とは違うものであったとしても、その方向に向かってチャレンジしていく気持ちを持ち続けたいと思います。これは口で言うのはたやすいのですが、また、入社をする時にはだれでも持っていた気持ちであるとは思いますが、改めて今実行するのは本当に勇気が必要で難しいことです。ただ、「自分の存在価値」ということを考えると、

今こそこうした気持ちが必要である気がします。自戒を込めてそう思います。

第六回の産政塾で、中国人留学生の李さんが「中国人と日本人について言うと、個人対個人で比較すれば、中国人の方が優秀であることが多い。ただ、組織での勝負となると日本の組織に中国の組織はなぜか負けてしまう。」とおっしゃっていました。何となく当たっていきそうです。ただ、これからの時代は、個々人の勝負でも勝っていかないと、組織も生き残れないし、結局はその個人も生き残っていけない世の中になっていくのではないでしょうか。将来、李さんに再度会うチャンスが巡ってきた時に、是非「日本人には個人の勝負でもかなわないよ」と言ってもらえるようになりたいものです。

変わらないきや



アイシン労働組合

杉 浦 公 紀

〔プロフィール〕

すぎうら きみのり (28歳)

- ・ 1969年 9月21日 名古屋生まれの豊田育ち
- ・ 1992年 アイシン・エイ・ダブリュ(株)入社
経理部に配属
- ・ 1994年 労働組合へ出向
現在に至る
- 〈家族〉 妻・長女(2歳)
- 〈趣味〉 ブログロすること

〈はじめに〉

今年で入社してから七年目になる。自分を見つめ直すというには少し時期が早いのかも思う。しかし、自分を考えるという意味においては絶好のチャンスだ。今から自分を考えておけば五年後、十年後には花が咲く。そんな淡い期待を持ちながら考えさせていたきたい。こんな素晴らしいチャンスを私に与えて下さった参政塾に感謝の気持ちをお伝えしてWordの手を進めていきたい。

〈労働組合執行委員になって〉

現在、専従の執行委員をやらせて頂いて四年目になる。執行委員に立候補した二十四歳の時、会社のイロハも分からず、ましてや社会の右・左も分からない若造であった。今は選挙の諸活動も真顔でやっているわけだが、組合に出向する前は選挙にも行った事がなかった。選挙にまったく興味の無い無関心層の代表選手である。また、会社の制度も休みの日が多い・少ないしか興味がなかった。独身時代にいたっては自分の給与についても、賃上げも大きいにこしたことはないがあんまり気にならないといった具合であった。また自分を自己分析すると自己中心的で他人の事など関係ないといった感情を持っていたと思う。今も若干その傾向が残っている。よくこんな奴が組合の執行委員に立候補したもんだ。本当に私にとつても、会社にとつても恐ろしいことをしてしまった。ただ、恐ろしいことをしてしまったおかげで、こうして自分について考える事・社会でいわれる常識・会社における常識等、様々な事を考えさせてもらえ、また勉強もさせて頂けるので今は立候補を促してくれた人たち

に感謝をしている。この貴重な体験をさせてもらっている今を大切にして、今後の自分にどんな形で
もいのでプラスになるように過ごしていきたい。

〈今、思う事（チャレンジスピリッツを持ちたい）〉

私は良く（チャレンジ）という単語を使ってきた。数社受けた入社試験もこの（チャレンジ）とい
う単語を頻繁に活用し、二社ほど内定を頂いた。今もあらゆる面接の場面で使っている。チャレンジ、
響きが良い単語である。しかし、何かにチャレンジせねばと思いつつも二十八年間生きてきて、『あ
あ、挑戦して良かったな』と心底自分に酔った事は、あったろうか。

あったとしたら、男子校に通っていた十数年前、地下鉄・地下街・ディスコに飲み屋と場所を選ば
ず・時を選ばず果敢に女子校に通うおねえちゃんをターゲットにナンパに明け暮れていたあの時だけ
だ。

ただ、この果敢なチャレンジのおかげで今の妻と娘はあるわけでどんな形にしろチャレンジするこ
とは重要だ。今隣の部屋で眠っている妻と娘を見るとつくづく思う。あの時の果敢なチャレンジが生
きていると。

挑戦をしない（出来ない）人はこんなタイプの人間ではないかと思う。
失敗を恐れるから挑戦しない人。何に挑戦したら良いか分からない人。人生、惰性にまかせて生き
ている人。ちなみに今の私には全部あてはまってしまふ。ああ情けない。

某自動車メーカーのCMではないけど、『変わらなきや』!!

現 状

今の私がチャレンジスピリッツを持って物事に打ち込めない一番大きな要因。それは、何に向かつてチャレンジスピリッツを持って打ち込んでいくのか、目標が定まっていないからだ。その他にも様々な要因はあるのだろうが自分が思い付く最大の要因は目標がないことだ。現状把握はこれでよし。

次に目標だ。目標なんて大袈裟なお題目を立てるとまた三日も立たないうちに挫折をしてしまうのは、火をみるより明らかなので軽く考えてみる。

今の世の中、政治・経済、社会問題に至るまでグローバルという単語がやたらと出てくる。グローバルの意味を訳すと全世界的な視野だったと思う。グローバル的な思考をこれからの時代は持つて生きていかないと会社でも社会でも取り残されてしまいそうだ。例えばTVのニュースにしろ、新聞のトップ記事にしろ世界に目が向いている。また考えようによっては、世界が分からなければ、日本の現状も分からない状況にある。だから、TVを眺めるにも新聞を眺めるにもある程度の知識がないとついていけない。TVを見るにも眺めるのではなく、真剣に見なければ凡才である私はついていけない。まったく、嫌な世の中である。

私としては、松田聖子のもとの恋人が聖子を逆セクハラで告訴（見方を変えるとグローバルな問題）だとか、失楽園現象が主婦に蔓延するといったネタの方がよっぽど興味をそそのくのだが……。

しかし、芸能ネタはTBSで土曜日にやっているブロードキャスターでしか見られないのである程度に興味を持って世界を眺めていかないとTVも退屈なものとなってしまふ。

TVを退屈なものとしないうちにも社会の動きに取り残されない為にもあらゆる知識（雑学）を自分に取り入れなければ・・・

自分のアンテナをより高い所に立てる事が重要だ。

その意味においては、産生塾でいろんな経験（体験）をしている人と出会え、見聞できた事は、自分にとってプラスにしていかなければならない。

見聞した事を自分の血や肉にして今後にいかしていこう。

〈今からチャレンジ〉

私の高校時代からの友人でおもしろい奴がいる。彼は、社場で流行の兆しが見えるか見えないかのうちに必ず流行物に飛びつくのである。夏はジェットスキーに冬はスノーボードといった具合である。彼は、大流行する前から飛びついているので言うまでもなく今ではヒーローである。夏は海・冬はゲレンデでお姉ちゃんの眩しい視線を一身に浴びているのである。

私はそんな彼を見て年甲斐もなく何をやってんだいつも思っていた。「今からやっただてなんにもなんないよ。」こんな風にである。

しかし、彼は何事にもとりあえずチャレンジしているのである。自分が（これだ）と思ったものすべてについてである。

チャレンジするのに目標なんて物はいらぬのではないか。

今、やりたい・知りたいと思った事すべてに取り組む。そんな事が一番大事なんだと今更ながら感

じたわけである。

今、私がチャレンジしたい事。それは英会話である。先程、世界が分からなければ日本も分からな
いと書いた。英語が分からなくてもグローバルな視野を持つて物事を考える事を常に頭に入れておけ
ば世界の動きを自分のアンテナに取り入れる事は出来るのかもしれない。けど、スキーにしろゴルフ
にしろ何をやるにつけても格好から入りたがる私としては、世界の共通語である英会話を少しでもか
じってから、世界の動きに注目していききたいと思うのである。

テレビを興味を持つて見る事ができるように、また英語の映画で字幕を見ないで笑えるようになる
ように英会話にチャレンジしていきたい。

ものになるかどうかは別としてとりあえず英会話への扉を開いてみよう。英語とは学生時代の一般
教養以来遠ざかっている（授業には出ていない）事が少し心配だが、いまさらとは考えず、何はとも
あれとにかくやってみよう。

これを機に自分が少しでも変われればと思う。

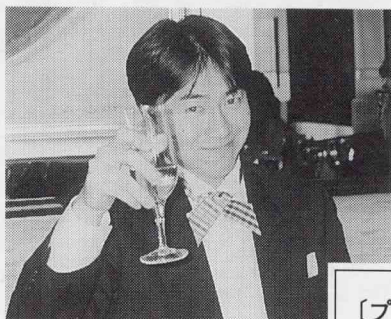
〈追 記〉

私は、専従の執行委員になってからおもしろいとか不思議な体験をしている。実は自分の父親
も専従の執行委員を数十年前やっていた。労連にもお世話になったと聞いている。その彼が労連の大
会・中央委員会・はたまた海外研修？で東南アジアを視察していたと思うのだが、そのような理由で
家を空けると必ず私は高熱を出し、救急車で刈谷総合病院に運ばれていたそうだ。実は二歳になる娘

が私の幼少の時の体験と全く同じ体験をしているのである。私が、札幌だ・仙台だと労連の大会に出席する時に必ず高熱を発生して、病院に妻が運んでいるのだ。物事は回り巡るといふ、不思議な体験をしている。

今回、とりとめもない事をなが々と書いてしまったが、私の決意表明とまではいかないまでも二十八歳の「自分の志し」として使わせてもらった事にお許しを頂きたい。

あまり知られていない私の一面



株式会社デンソー

中 條 喜 之

〔プロフィール〕

ちゅうじょう よしゆき (27歳)

- ・ 1970年10月8日 奈良県生まれ
- ・ 1993年 日本電装(株) (現(株)デンソー) 入社
人事部企画にて賃金制度を担当
- ・ 1997年 同じ企画で人事制度企画を担当
現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 ドライブ、スキー
最近必要に迫られゴルフをはじめた

社会人になって五年が過ぎようとしている。社会がこの五年間に、ここ何年もなかったような大きな変化を遂げてきたのと同じく、私にとってこの五年間は、小学校の一年生から五年生までの期間や、高校生から大学生の五年間以上に様々な出来事が起こったような気がする。少し思い出してみても劇的な出来事がいくつも挙げられる。まず、大学まで奈良の田舎で過ごした私が、社会人になって初めて名古屋へ来たこともあって、周囲に知り合いが一人もないという状況にたったこと。毎日が八時間以上も拘束されるようになったこと。定額の給料が毎月手に入るようになったこと。盲腸で初めて手術・入院したこと。少し照れくさいが、結婚し守るべき人を持ったことなどなど、大小様々ではあるが私にとっては大きな出来事の連続であったと思っている。(人からすれば些細なことかもしれないが……)

前振りが長くなったが、ここからが本題である。私にとつての激動の五年間、この社会人生活を送る中で、私は社会人になって新しい人間関係を数多く作ってきた。しかしながら、私の妻以上に周囲の人間で私のことを全部知っている人間は数少ない。これは私だけではなく、多くの人がそうであると思う。学生時代までは、学校もそれ以外でも周りの人間(家族を除く)と過ごす時間は、寝る時間以外はともに過ごしてきた環境から、お互いのことを良く知ることができた。ところが、社会人になると、会社での時間以外で周りの人間と一緒にいる機会は極端に減ってしまうからである。そこで、今回はよい機会と勝手に思い、私が自己紹介でもほとんど言わないある一面をお見せしたいと思う。

自慢ではないが、私は無類の本嫌いである。小さい頃からずっと変わらないことの一つである。ゴシップ雑誌やマンガ雑誌は読むが、小説はもちろんのこと、ハードカバーの本などは必要に迫られない限り自分からはほとんど読まなかった。(本当に自慢できる話ではない)。こんなことは、この文章を読んでもらっても分かってもらえと思うが、そんな私でも、興味を持って読むことがごく稀にある。それは、物事の本質に迫る類の本である。これは今思えば、小学一年生の時に親から買い与えられた二冊の図鑑がきっかけではないかと思う。その図鑑は「宇宙」と「地球」。これには宇宙や地球の起源は何か、いまはどんな状態にあり、これからどうなっていくのかといったことが書かれており、それを理解するのに何度も読み返したことを覚えている。その後も子どもの頃は、物語や小説は読まないのに、「なんとかの秘密」とか「なんとかの不思議」とかいったものは一生懸命読んでいた。本は大嫌いな代わりにテレビは大好きだったのだが、そこでもアニメやお笑い以外で見るといえば、そういった物事の真実に迫る番組であった。(ちよつと違うかもしれないが、水曜スペシャルでやって「川口浩探検隊シリーズ」を本当の話だと、嘉門達夫の歌が出るまで信じていたのもそのせいかもしれない)。以来、たまに本を読む機会があれば、そんな類の本なら興味を持って読んでいた。中でも自分でもグレート!と思えるのは、高校一年生の頃に読んだアインシュタインの「相対性理論」の解説書である。物理はまったくできないくせにただ興味だけで読んだ。全部読んだのだが、記憶に残っているのはほんのさわりの部分と「すごい」ということだけである。

このような私を周りの人間が知らないのは、私が話さなかったからではなく、私が話してもこの

ようなことに興味を持つて耳を傾けてくれる人間がいなかったからである。密かに寂しいと思いつつも、聞いてくれる人がいないのなら仕方ないと思つていたが、今回このことを文字にする機会ができたので、そのなかでもよりすぐつて一つ皆さんに知つて頂きたいことを次に書いてみた。

その話とは、二年前ぐらいにベストセラーとなつたグラハム・ハンコック氏の「神々の指紋」シリーズ（翔泳社、一九九六年）の話である。ベストセラーになつたほどであるから、当然知つているだろうと話を切り出しても、読んでいない人が多い。（そこでここに書くことにしたのだが、今回の熟読の主旨にあまりにも反するということと、これを読んで興味を持った人と話すことがなくなつてしまうことを恐れて、すべては書かないことにするが、そのさわりの部分だけ紹介する）。この本は、現在知られている文明の起源よりもさらに古い時代「先史時代」に隠された巨大な謎に迫るものである。現在知られている歴史では、文明が最初に生まれたのは、中東の肥沃な三角地帯で、それが発展したのは紀元前四〇〇〇年以降のことであり、皆さんがよく知つている世界最古のエジプト文明が最盛期を迎えたのは、紀元前三〇〇〇年頃。それ以降、世界の各地で文明が興り、進化を遂げて現在に至るとされている。しかしながら、グラハム・ハンコック氏の本によると、それ以前の紀元前一万二〇〇〇年の昔に、高度に発達した文明があつたというのである。

ここまでだと単なる空想小説でしかなく私も皆さんに話せるようなものではないのであるが、私を魅きつけたのは、彼がその証拠を次々と列挙し、またそれらが実に真実を物語つている点である。数ある証拠の中でも、皆さんが信じていることでもよく考えてみると不思議に思えることを挙げてみる。

例えば、エジプトの「ギザのピラミッド」。その中でも最も大きな大ピラミッドは、四五〇〇年ほど前に、二十年間かけて約十万人の人の手で建てられたとされている。この建設には、平均三トン程の石が約二三〇万個が使われているが、もしも当時の人々が一年間三六五日一日十時間働いたとすれば、一時間に三十一個の石を据え付けた計算になる。これは非常に疑問の残る数字である。

さらに、このピラミッド群の中にある河岸神殿と呼ばれる建造物では、ピラミッドより大きい二〇トン以上の重さの石が数百個使用されており、中には一二メートルもの高さのところに据え付けられているという事実も見逃せない。この一個の石を持ち上げられるクレーンは、現在の地球上でも二台しかないのである。当時の文明に照らして考えると、一体どのようにしてそれを可能としたのか。

もっと不思議なこともある。現在南極大陸は約三キロメートルにも及ぶ氷で覆われており、氷のない状態で南極大陸を調査できたのは、地質学上の調査によると紀元前四〇〇〇年よりも前になる。ところが、現在になってようやく地震探査なる方法で氷の下の方の南極大陸の地形が解明したにもかかわらず、一五〇〇年代にピリ・レイスが作った地図には、氷のない南極大陸が現在明らかになった南極大陸の地形とほぼ完全に一致する形で描かれているのである。ピリ・レイスによると、この地図はその時代よりも古い時代の地図をもとに模写して作ったものだという。参考にした地図もさらに古い地図を模写したものであろうが、一体誰が六〇〇〇年以上の昔にそのような地図を作成したのか。

これら以外にも、現在知られている文明以前の痕跡の事例を数多く紹介しているわけではあるが、ではそれらを可能にした文明は、いつどうして滅んだのか。それらのヒントは地球上のある地点に集中して残っている可能性があるとも書かれている。この続きは本で読んでもらうか、私に是非とも聞

いてほしいものである。

とまあ、こんな調子ではあるが、いかがなものだろうか。私が如何にこのような類のものに興味を持つ人間かが分かつて頂けたと思う。但し、仕事関係での真実を追求する類のものは勘弁して頂きたい。

しかしこれは、ここで紹介した本同様、私のほんの一面でしかない…。

と、ここまで書いて私はようやくあることに気がついた。周りの人間が私を知らないのは、誰かに話しても聞いてくれないからとあきらめていたからでは。ここで文章として書いたように、私が自分から自分のことを分かつてもらおうと積極的に行動しなかったせいではないだろうか。いままでそんなことにも気付かなかったのか、と言われればそれまでだが、こんなことに気付いていなかった自分がとても恥ずかしく思われる。こんな自分をさらけ出すのも、私のある一面の紹介になるのであろう。

産政塾に参加し、最後に、このことに気付き、この塾誌をきっかけに今後の人生を積極的に生きようと心に誓う自分が今いることが、この産政塾に参加した成果だと思っている。大げさではあるが、真剣にそう思っている。今は…。

『娘の一言』



関東自動車工業株式会社

所 秀 樹

〔プロフィール〕

ところ ひでき (32歳)

- ・1965年 北海道帯広市生まれ
- ・1987年 関東自動車工業㈱入社
経理部、総務部を経て
- ・1993年 人事部 現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女
- 〈趣味〉 スキー
- 〈モットー〉 艱難汝を玉にす

一、はじめに

昨年の十二月に始まった産政塾第八期の約一年に及ぶ活動も、早いものでこの「卒論」ですべてが終了する。振り返れば、塾生に選ばれたときに感じたことは、当社にとって産政塾参加が今回初めてであったことから、嬉しさの反面、第一期生としての責務の重さであった。

塾での議論では普段あまりスポットをあてて考えていないこともゆつくり考えることができ、大きな糧になったが、会社の看板が常に付いてまわるため、やはりプレッシャーを感じずにはいられなかった。

また、会社内での業務が多い自分にとって、各方面で活躍している講師の方々をはじめ、同年代の塾生の仲間と率直に意見を交わすことができたことは、多くの考え方や、物の見方に接し、自分というものを客観的に評価することができ、大変有意義なものであった。

二、入社から十年

早いもので入社して十年が過ぎた。学生気分抜けきらない新入社員時代から今日まで、公私ともに実にいろいろなことがあった。あまりにも多くのことがあり、消化不良の面も否めない感はあるが、充実した日々を送っている。

現在担当している仕事はやりがいがあり、そして、何よりも目標とする上司・先輩を持つことができ、二十二歳で当社を選出したことが間違えではなかったと思い、大変満足している。プラ

イベートな面でも、結婚・長女誕生とささやかながらも家庭を育んでおり、自分の人生の中でも大きく大切な十年であった。

また一方では、入社して十年も経つと「自分」とはどのような人物であり、長所短所はどんなところであるかが良く分かってくるものである。自ら気付いた点もあれば人から指摘された点もある。至らない点は試行錯誤を繰り返しながらも、日々、自己反省と自己改革に努めているのだが、なかなか思うように直らない。こうしてペンを執っていても、反省すべき点が多々出てくる。

その中の一つに、何気なくつぶやいた娘の一言もある。

三、パパどうして？

私の故郷は東京から千数百キロ離れた北海道帯広市である。北海道東部に位置し、肥沃な十勝平野の真っ只中にあり、街の北と西には二千メートル級の山々が連なる雄大な日高山脈が姿を見せる。自然に富み、時間がゆつくりと流れ、都会の喧騒などまったく縁のないところである。また、妻の実家も青森県にあり、こちらも私の故郷に匹敵するくらい自然が豊かにある。夫婦そろってはるばる上京してきたのである。

このため、帰省の際には飛行機の利用が不可欠であり、当然三歳になる娘も妻のお腹の中にいた時から飛行機を利用している。そのせいか、娘は大の飛行機好きであり、普段はどこに行くにも妻にべつたりしているのだが、飛行機に乗る時には我先へと一人で機内に走り込んで行く。特に、機内の窓越しから見える地上の風景が一番のお気に入りらしく、着陸まで窓に顔を押し付け見入っている。

ある時、いつものように娘が窓から地上の風景を見てると「どうして飛行機は飛ぶの？ パパどうして？」と繰り返して質問をしてきた。

この年の子どもが誰でも行う質問攻め、いわゆる「好奇心の表出」である。普段、家にいる時にも娘はいろいろなことに関して質問を浴びせてくる。最初の質問に答えると、また、その答えについての質問。その繰り返しが続く。普段、なかなか娘と遊ぶ時間のない自分にとって、家族の絆と娘の成長に大きく寄与するものと勝手に思い込み、ここぞとばかりに優しく丁寧に（？）答え続ける。無論、愛情を第一に考えているのだが、時々、娘の熱意から逃げ出すこともある。

この時も、私の説明に対して、いつものように娘はニコニコしながら頷いた。理解しているのかはなはだ心もとないが。

ところで、この時の娘の質問は、なぜか自分自身の考え方に対して疑問を沸かせるものであった。自分の答えた内容、飛行機のメカニズムについての知識不足といった単純なものではなく、考え方の根底に対する警笛のようなものであった。

四、問題意識

普段、何気なく行っていること、使っていることに対してどれだけ自分は深く考えているのであろうか。物事を表面だけで判断し、行動してはいないだろうか。また、感覚的に物事を捉えてしまい客観的に見ることを怠ってはいないだろうか。娘の一言がこのことを示唆してくれたのであった。

例えば、飛行機はどうして飛ぶのか。電話はどうしてお互いに声が聞こえるのか等々。多くの人は

ある程度の答えはできても、具体的なことまで答えることは難しいのではないだろうか。

飛行機が飛ぶのは翼で揚力を生み出し、エンジンで推力を得ているからだと言明することはできても、ではどうやって揚力が生み出されるのか。そもそも揚力とは何か。ジェットエンジンの構造はどうなっているのか等々。このあたりまで深く考えてみたことはあまりないのではないか。飛行機は飛ぶものであるという固定観念がいつしか「なぜ」という思考の原点を麻痺させてしまっているのかもしれない。恐らく、私も表面的な考え方、物の見方しかしておらず、なぜそうなるのかと物事の本質を探究しようとする姿勢が無意識のうちに甘くなっている。

一方で、飛行機がなぜ飛ぶかについては、それに関わる企業の人と学者ぐらいが知っていれば、私たち利用者に何ら影響がない。代金さえ支払えば確実に目的地まで移動するこちらができ、何も考える必要がないのである。日常生活を送るにあたって、飛行機がなぜ飛ぶかという問題意識など全く関係のないことであり、社会も便利なこのシステムに支えられていることも事実である。

確かに、問題意識がなくても生活はできるが、問題意識があればより深く充実した生活ができるということである。知らないことを知ろうとする気持ちは、知識を豊かにする原動力となり、なぜそうなるのかという気持ちは物事の本質を理解する源となる。物事に対して問題意識を持つことが人間の成長に欠かせないものであり、仕事に携わる者にとって絶対不可欠なものである。

五、殻の外に踏み出すために

自分の知らないことについては、本で調べれば良い、また、誰かに聞けば良いと知るためのノウハ

ウは年齢とともに蓄積してきたが、単に、年を取ること、要領だけ良くなつてはいないだろうか。肝心なその先の自分で考える部分についてはあまり成長していないように思える。

時間的な制約があるのも事実だが、これにかこつけて考えることを避けてしまっているのではないだろうか。日常生活でも仕事においても、「時間がないから」、「自分と関係がないから」と、無意識のうちに後ろ向きの姿勢になり、深く考えることを避け物事の本質を捉えていないことがある。確かに物事を深く考えることは、面倒で骨の折れることも多々あり、容易なことではない。人間はややもすると楽な方に進みがちであるが、その結果が常に良い方向になるとは限らないのである。

子どもの「なぜ」、「なぜ」という物事に対する疑問・好奇心は、生まれながら平等に皆が持っているものである。それがいつしか環境などにより、人々の間に思考の度合い・方向に差が生じてしまう。人間は自己を改革する力を持っている。私も、もっと考える力を身につけ、本質的な部分に迫れる人間になりたいと思う。「この位でいいか」と思う前に、常になぜそうなるのかと深く考えることができる人間になりたい。考えて導き出した答えの正確さもさることながら、その姿勢も大事なものである。何事にも替え難いものがここににあるのだ。

今期の産政塾のテーマ「殻の外に踏み出そう」を考える上で、娘の「どうして」が一番のアドバイスとなった。

今日も娘の「どうしてなの？ねえ、パパ」にたくさん答えよう。娘の新鮮な視線が私自身の忘れかけていたものを思い起こさせる最高の機会でもあるから。

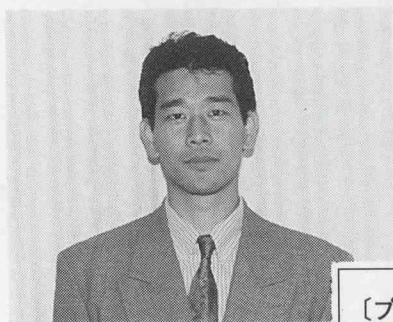
「パパ。どうして象さんの鼻は長いの？」隣の部屋から娘の声が聞こえる。さあ、どう答えていいのやら。

六、終わりに

産政塾の出席に理解を示してくれた上司・同僚の方々に感謝する気持ちで一杯です。また、第八期塾生の皆さん、そして事務局の丹羽さんには大変お世話になりました。塾での貴重な経験を公私に生かしていきたいと思えます。ありがとうございました。

以上

「98年の春に考える」



豊田合成労働組合

丹 羽 広 志

〔プロフィール〕

にわ ひろし (31歳)

- ・ 1966年 6月14日 愛知県生まれ
- ・ 1987年 豊田合成入社 人事部に配属
- ・ 1996年 労働組合へ出向 現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女・長男（双子）
- 〈趣味〉 自動車・女性鑑賞

人間五十年

「人間五十年 下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」織田信長が好んだ歌であり、本能寺の変で辞世の句になったとも言われる有名な歌である。私はこの言葉が好きである。人生を振り返れば、長い夢のようなものだ。時は過ぎ、全てが過去になっていき、そして死を迎える。それが運命というものである。悩んだり悔やんだりしても何も始まらない。とあの信長でさえ言っている。

私は、予てから「自分の人生は、六十年で終わる」ものと考えようとしている。漠然とした思いであり、根拠などないが、怠惰な生活を少しでも引き締めるため、日頃から心掛けている。世間には「四十一歳寿命説」などという本まで出ており、それからすればこの心構えも満更おかしくはないと言えるよう。

しかし、この歳（六十歳）に近い、またはそれ以上の人からすれば、「何と浅はかな」と思われるのではない。自分でもそうである。もし仮に自分の息子に「自分の人生はあと三十年（自分と同じ様な）で終わると思っている」などと言われたとしたら、己の立場を忘れ「何を生意気な、三十なんて歳は子供の延長線上であり、誰でもなれるものだ。世間を知らない者が偉そうなことを言うもんじゃない。そんなガキのまま死んでたまるものか」と言ってしまうことだろう。

翻って考えると、人はそれ程までに「己の歳」については無頓着で、危機感がないということである。人はなぜ今日終わるかもしれない人生を、まるで空気の様に無限に感じてしまうのだろうか・

世の中が楽しくない日本人？

「世の中がどうにもつまらなく、くだらないと感じる日本人が多くなっている。それは日本人が『死』というものを身近に感じなくなったせいである。『死』を日々身近に感じていればそんなことを言っていられるであろうか」。誰が言ったのか、またその言葉で言っていたのかも定かでないが、そのニュアンスだけが脳裏に焼き付いている。

病氣などで命があとわずかと知らされた時が、その反対の例ではないか。人はそうなった時これまでは比べものにならない程、残りの限られた時間を精一杯生きることが多いと聞く。自分にはそんな勇気が出るだろうかと不安にもなるが、しかし、よくよく考えてみると、ことは同じではないか。ある人は「有期限で、ある程度明確な命」なのであり、ある人は「有期限で、ちよつとだけ不明確な命」なのである。有期限であることは何の変わりもない。ちよつとだけ明確か、そうじゃないか、たったこれだけの違いなのにまるで後者は無限の命が与えられた様に錯覚し、しかも不明確がためにその大切な期間までもつまらなく感じてしまう。またそれから逃れるためか、今だけ楽しければ何でもいいと利他的に行動してしまう。こんな日本人が増えてきたのは確かな様氣がする。

こんなことを言うこと自体、歳をとった証拠なのだろうか？

タイムマシーン

これまでの小さな人生にもいろいろな出来事があった。答えは絶対がないなどと信じ込んでいたこ

とが、非常に単純で小さなものであったりする。その様に思い込んでいたことが大変幼稚で恥ずかしく思うこともある。今であればああするのに、なぜあの時しなかったかとも後悔もする。こんなことがあると、短絡的であるが「もし、今の意志・意識を持つ自分がそのまま過去の十年前、二十年前に溯り、やり直しができたら何と素晴らしいだろう」などといったバカな思いを持つ。

しかし、これは現時点でも同じことが言えるのではないか。今悩んでいることも十年後、二十年後にはちっぽけなものとなっているのだろう。そして否応なく明確な答えが出ている。今、過去の態度に悔やむ様に、「三十一歳の時にあおしておけば良かった。なぜ俺はあの時しなかったのか。もう本当に時間はなくなつた」と今以上に悔しがっているのではないか。

人生の「答え」というものは、未来のある時点で急にポンと出るのではなく、現在の行動とその積み重ねの繋がりにあることに近頃ようやく気づいた。今やっていること自体が「未来」なのであり、「答え」の一部なのであろう。

「答え」を導き出すための正しい行動とは何なのか、また今行っていることが本当にその「答え」に繋がっているのか、今はわからないし、将来も探して当てるか自信もないが、現在と過去で決定的に違うと思えるのは、これに気づいた自分がいることである。

少しは成長できたか？とちょっとだけ思いたい。

人生の残り時間を引き算で考える

遭難者が残り一かけらのパンを「もう一切れしかない」と取るのと「まだ一つある」と取るのとし

たら、自分ならもちろん後者を取るだろうし、またその思いが生存率にまで影響するとも何かで聞いたことがある。

世の中の多くの事柄に対し、このポジティブシンキングで対処することが重要であるといったことは、世間でもよく言われている通りであり、日々実践しようとしているが、こと「人生という時間」においてはこの考えが妥当なのか疑問に思う。

まだ「三十年もある」と考えるのと「もう三十年しかない」と考えるのではどちらが正しいのか。そんなものに正解はないだろうが、自分としては、後者を選ぶべきであると考えてる。なぜなら前述にもある様に、この先の時間は全く不明であり、実はそれ以下の時間しか残されていないかもしれないからである。そんな状態で「まだ三十年もある」と考える呑気な自信は無くなった。だから今、自分は「人生の残り時間を引き算で考える」ように努めている。

まもなく自分は三十二歳になる。先ほどの計算からすると残りは二十八年、もう半分以上が終わっている。日数に直せば一〇、〇〇〇日ちよつとしかなく、来年にはこれを切ることになる。これまでのちつぽけな人生以下の時間しか残されていないと思うと、また一〇、〇〇〇日という具体的な数字で見ると、残された時間の短さに愕然とする。

働くことは好きだし、もっともつというんなことをしなければならぬと思う。後悔しないために、今何ができるか、何をすべきなのかと考えると、休んでなんかいられないことに気づく。

自分の死をポジティブに考える

ものごとは最悪の状態を想定しながら、最高にポジティブ（能天気？）に生きていくべき姿勢が重要。とこれまでの人生の中で感じ取った。そうであるならば、自分の「死」までもポジティブに考えてもいいのではないか。

「人は死ぬのである」。絶対に己だけ逃れるわけにはいかない。墓に何かを持っていくこともできない。そう考えると何に囚われる必要があるだろう。何もない。これほどポジティブに考えられることがあるだろうか。

努力して、失敗するのであればすばしい。人にほらふきと言われようが、身の程知らずと言われようが、大きな口を叩くべきである。己の実力のなさは己が一番思い知らされるのだし、自分で責任を取るのだからあまり気にしない方がよい。ちよつとやそつとのことです今の日本、餓死することはないし、女房・子供たちの食いぶちくらいなんとかする、しなくちゃならない。そう考えるといろいろと囚われている概念から抜け出すことができるし、心の中にふつふつと勇気を沸き起こすことができる。

「人は必ず死ぬのである」。これはどんな金持ちや、どんな偉い人がどうしようと変わらない。全ての者に平等に与えられている。

それならば何を恐れることがあろう。何もない。

世の中が甘くない、ということとはわかってきたつもりだが、しかし、そう思うことがこれから「き

ちんと“生き抜いていくための条件であるように思えてならない。

ならば、殻になど閉じこもっていられるだろうか。そんな訳あるはずがない。自分の信念に基づき、正直に生きていこうと思う。（これが最高に難しいのだが）

「人間万事塞翁が馬」

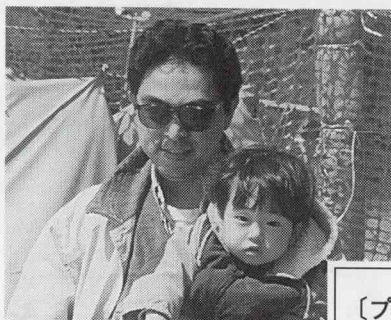
……悪いこともあれば、いいこともあるさ。

「我事に於いて後悔をせず」

……僕は、絶対に後悔はしない。

以
上

「深夜の独り言—いつの日か息子へ」



トヨタ自動車株式会社

根 本 恵 司

〔プロフィール〕

- ねもと けいじ (37歳)
- ・ 1961年 福島県生まれ
 - ・ 1985年 トヨタ自動車(株)入社
約10年間を海外企画部で送り
96年より人事部企画室
- 〈家族〉 妻、長男 (2歳)

「つい先日」入社したはずなのに！ 月日のみ白々と流れ、無情にも今年で三十七歳。（今年の健康診断で体力測定をやらされたが、結果は体力年齢五十歳代。因みに体脂肪は二十八%であった。）もとより（学生の頃から）「老成してるね」と周囲から指摘される「立派な青年」ではあったが、その後も順調に成長を重ね、この頃ではノスタルジーに耽ける術も身につけつつある。「振り返り、樂しめる思い出があるのは結構だ」と自分自身にうそづいても心は寒い。「幼き日の夢」を何一つ実現できていないのだから。人生をやり直せるなら？と問われれば、間違はなく他の道を選ぶだろう。あのフランクリンの心境には遙か遠い。（現在の自分は紛れもなく、これまでの個人的な体験と思考の「なれの果て」である。ひとえに私の責任である。会社で「自己責任の原則」を振りかざしているので筋は通したい。）

振り返った時、それぞれの時点において樂しかつた思い出、大事にしたい記憶は当然ある。しかし、過去全体に対する「悔いのようなもの」を消し切れない。原因は、煎じ詰めれば、自分の生き方を自分の意志で選び抜いたとは言いつても自信の無さに行き着く。高校そして大学への進学において、将来のビジョンを描いていたであろうか。「とりあえず、あそこに行っておこう。後で決めよう。」を繰り返しただけではなかったか。しかし、大学に入学した時には気付いていたはずである。ここで決めないとは後がないことを。

学生の特権は全ての可能性を秘めていることである。しかし、「全て」は「ある一つ」を選んだ時に消滅する。選ぶことは、（他を）捨てること。私は、永久に失うものに対して未練を断ち切れず、明らかな人生の岐路において、「選択する重圧」に負けた。大学の通算出席率五%、何も決めないう

ちに迎えた就職の時期。サラリーマンを願ったことなど一度も無いが、モラトリアムの中で自己鍛練を徹底的に怠った人間に他の選択肢などあるはずもない。無気力のうちに重なる企業訪問。金融を除けば、どこでもよかった。

育ち方・育てられ方は時代と共に変化するにしても、幼い日々、誰しも両親の全幅の愛情に守られて育つべきである。私は母方の祖父が戦時中に疎開し居着いた場所で生まれ、今から思えば「戦後の空気」が消えようとする微妙な時代環境の中で育った。私の家庭も豊かさとは縁がなかったが、若かった父と母は、また当時の標準的な愛情をもって私を育てたように思う。感謝することは多々あるが、その最大の一つは一度も「少しは勉強しなさい。」と言わなかったことに対してである。いわゆる放任ではなかったが、父の考える「人間として」の基準をはみ出ない限り、自由であった。ひたすら遊んだ。また、勝手に本を読み無責任に夢想した。この至福の時期に描いた将来の希望はどこへ消えたのだろうか。

中学に入学してから園車が狂い始めた。中学は、唐突に現実的であったと思う。しかも極めて偏った価値を共有する小社会であった。先生達は、偏差値による序列しか頭になく単純な人達の集団（に見えた）。生徒達は、先生の吹く笛に訳も分からずに踊った。私自身も、居心地の悪さを感じながらゲームと割り切った。救いのはずの放課後の部活動も根柢の無い集団・年功主義に満ちて、私の居場所ではなかった。私の教職不信と徒党を組むことへの生理的な嫌悪感は明らかにこの時期に遡る。（もともと当時の先生方も上位の空気に支配されていただけで一人ひとりに罪を着せようとは思わ無いが。）それにしても妙な時代であったと思う。私の育った地方だけだったのだろうか？全国津々浦々

同じようなものだったのだろうか？今は教育も少しは改善されたと聞くが、自分の子供を学校任せにする気には、私はなれない。

会社より機会を頂いて二年間、妻と二人でアメリカ（ニューヨーク州ロチェスター市）で生活をした。日本とアメリカ。どちらにも長所短所があり総合的な社会システムとしてどちらが優れているかは知らないが、教育の在り方は見事に異なる。シンボリックに言えば、「客観的な」答えが先にあって、それに合うよう子供を鍛えるのが日本。先にある答えに合わなければ×（パツ）。合わなければ合うまで子供の思考を矯正し、画一を製造する。忍耐力は養成されるが、今さら何か新しいものを創り出せと言うのも酷だろう。アメリカは、「あなたは？あなたは？どう思う？どうしたい？なぜ？」を徹底的につきつけ、論理と自立（結果への自己責任）を要求し、自分の希望に早くから向き合わせる。子供にとっては、さぞ過酷なこととも思う。一部に見られる極端な自己主張、夢の過大な膨らみ、子供並の忍耐力は、教育の在り方に端を発し、家庭問題・人種問題・富の異様な格差（*）などといまつて、アメリカの闇の部分に雪崩れ込んでいく。

（*）記憶が正しければ、ビル・ゲイツの個人資産が、アメリカの下層四分の一（約五千万人）の総資産を上回ったと先日、報道されていた。

世の中は本質的に差別である。学校教育が社会に旅立つ準備の場であるならば社会の現実を避けてはいけない。一昔前に運動会のかけっこ競争で序列をつけない小学校の話に笑った記憶があるが、明らかに偽善である。序列化（代表は通信簿）は必要悪であると私は思っている。しかし、（今、企業の評価制度の見直しの中で議論されているように）評価は育成のためのものでなければならぬ。国

語4、算数3のような付け方は赤裸々にすぎる。各自が、何が得意であるのかを見極める手段として使えばよい。本来は、絶対評価、せめてその本人の中での相対評価で良いのだろう。年端もいらない子供たちが期毎の数字に一喜一憂したり、自信を喪失したりする姿はとても健全とは思えない。また、美術のような情操的な教育において、他者が、さも基準があるかのごとく評価するのも如何なものだろうか。

中学・高校時代に、両親特に父親ともっと話をすればよかったと思う。中学に入り、年齢的にも親離れが進む時期に、先程の違和感が加わり勝手に自閉していった。親から言われなくとも空ろに勉強に取組んでいた自分の息子を父はどう思っていたのだろうか。恐らく悪いことではないと思っていたのだろう。そういう時代だったのだから。しかし、甘えになるが、何か言って欲しかったと、今にして思う。子供に絶対的に欠けているのは経験を積むことから生まれる、物事を相対的に見る力ではないだろうか。当時の私に、現在が長い長い人生のほんの助走に過ぎず、目先にあることが本当は悩むに値せず笑い飛ばせば済むことだと知る力はなかった。勉強の先に待っているもの、もっと大きくて大事なものについて父の話を聞きたかった。

平成八年六月二十九日。梅雨の合間の晴れた日曜日の午後、長男麟一郎が生まれた。私が三十五歳の時である。二十八歳で結婚したのだから遅いほうだろう。理由はいくつがあるが、私自身が父親になる資格みたいなものに拘りつづけていたせいである。私の子として生まれて幸せか？これからの時代に生まれて幸せになれるのか？この種の問いに自分なりの答えを出して、やっと父親になった。私の半生の中で私自身の意志で何かを選んだとすれば、結婚を除いて、これが唯一無二である。

つい先日二歳になった息子は、単語の他は「パパ居た」くらいしかまだ言えない。寝静まった姿を見ていると、この子の責任は全て私にあると思う。悩みから解放された幸福な時が少しでも長く続くことを願うが、岐路に立たされる日も遠からず訪れるだろう。いつの日か、息子が悩んだ時、邪魔をしない程度に、私なりの考え方を独善に陥らぬよう出来るだけ相対的に語りたいと思う。後に生まれた者は先に生まれた者を踏み台にすればよい。それまでに息子の強い味方になれるよう私も自分を鍛えておかなくてはならない。時間も思っている程にはないだろう。その時が来たら、一生をかけて追う夢を逞しく選び抜くために、今は、遊び、笑い、たっぷり夢を見ておいて欲しい。息子の人生が「夢を実現」する人生であることを切に願う。

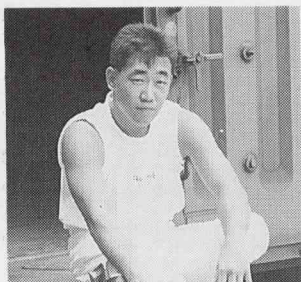
追記..

中部産政塾の丹羽さんから、「あと二人ですから、そろそろですよ」との催促の電話を頂いてしまい、急いで書きなぐったが、読み返してみると、何とも自分らしくなく、「ケッコウ、オレって真面目ジャン!」のような文章になってしまった。家では文字どおり「酒を飲んで寝る」だけだが、たまに精神的に参ると(実は、よく参る)、深夜に仕事や家族から離れて自身と向き合うことがある(目的は荒れた精神の自浄と粹がつているが、現実からの逃避に終わるのが落ち)。夜の文章が危険であることは誰でも経験済かと思うが、その通りになってしまった。書き直す気力がないので、このまま出させて頂く。ついでに書くと、本日は参議院選挙の日である(二月のメ切をしっかり守られた多くの方々には本当に申し訳ないと思っております)。私も皆さん同様に?誰に投票したものか未だに分

からないが、政治家の方々には、そろそろ真剣に「名誉」を求めて頂きたい。先日妻と、老後はどの国で過ごすかについて話したばかりである。

以上

「明るく・楽しく・前向きに!!」



デンソー労働組合

服 部 健 司

〔プロフィール〕

はっとり けんじ (35歳)

- ・ 1986年 日本電装(株)(現在(株)デンソー)入社
(工機部企画に配属)
- ・ 1996年 デンソー労働組合執行委員、現在
に至る

〈家族〉 花の? 独身

〈趣味〉 野球・テニス・ゴルフ等

「世の中不公平だ！」そう思ったことはありませんか？いくら「人間は皆平等」などと言ってみても、生まれつき才能に恵まれている人はいます。

私は少年野球のコーチ（子供の遊び相手？）をしています（現在はほとんど練習に顔を出していないので、正確には「していた」と言った方が良いでしょうが……）その経験を通じてもやはり人間には持つて生まれた才能というかセンスというものがあるように感じます。ただ、その才能を開花させるためには、皆さんがそう思われるように、「努力」というものが必要不可欠であります、それに加えて「気持ちの持ち方」といったようなものも非常に大きく影響しているように思います。

「プラス・イメージ」をしている時は、仕事や学習というような、様々な物事が思いのほかうまくはかどったり、時として、そこに自ら意外な能力が発揮されたりする事は誰もが何度も経験していると思います。

また反面で「マイナス・イメージ」をしている時には、イライラするばかりで、物事がさっぱり進まずに、ストレスだけがたまっていくというような事も、よくある事なのではないでしょうか。

（余談になりますが、ミスター・ジャイアンツ長島茂雄が天才たる所以は、およそマイナス・イメージなど持ちそうもない？（失礼！）その性格にあるのかもしれませんがネ!?）

それでは、一体、このような事が、どうして起こるのでしょう。

専門的な事はよく分かりませんが、プラス・イメージすることによって「快感のメカニズム」が働きドーパミンとエンドルフィンという物質（ホルモン？）が心と身体を活性化させてくれていることが科学的に解明されているそうです。

では、「プラス・イメージ」とは一体どういうことなのか。私が以前読んだ本の内容をご紹介します。

プラス・イメージのコツはひとことと言うと「今までとちよつと考えを変えてみる」ということで、それは、ひとつのものごとには、色々な角度からの見方があるということを知ることであり、それを知ると人間は気が楽になり、気持ち良く生活できるようになります。また、「今までとちよつと考えを変えてみる」には法則があり、それは

- 1、アバウトシャフトの法則（完璧主義をやめる）
- 2、累積シフトの法則（何事も足し算と考える）
- 3、シャドウシフトの法則（自分をほめる）
- 4、オカルトシフトの法則（超自然的に考える）
- 5、プロシユーマーシフトの法則（損得抜きで考える）
- 6、フォーカスオンシフトの法則（一期一会と考える）
- 7、まるごとシフトの法則（全体の動きから考える）
- 8、タイガーシフトの法則（理想への過程と考える）

9、お手柄シフトの法則（自分にごほうびを用意する）

10、マルチシフトの法則（大胆に視点を変えてみる）

11、悪魔の心の法則（他人のアラを探す裏ワザ）

というものです。紙面の都合上？これ以上の詳細な紹介は割愛させて頂きますが、参政塾の講師を務めて頂いた方々は、まさにこれらの法則を無意識にかつ非常に上手く使い、柔軟な考え方を持ち、かつ常に前向きに生きておられ、すごく輝いて見えました。

冒頭にも書いたように、世の中は不公平であり、幸・不幸のバランスは人によって差があつて、決して平等ではありません。しかしながら、幸せになる可能性は誰にでも皆平等に与えられています。後はいかに、自己を磨き、プラス・イメージを持つて前向きに生きていけるかにかかっているのではないでしようか。

「明るく・楽しく・くよくよせず・前向きに生きていこう!!」

自分の考える、人生の成功者となるために・幸せな人生を送るために……

参考文献「プラス・イメージ革命」監修…富田 隆

〈あとがき〉

今回、参政塾に参加させて頂き、いろいろな方々と出会い・語らうことができ、本当に貴重な経験させてもらいました。ありがとうございました。

我 思 う



(株)松坂屋 本社人事部

早 川 範 一

〔プロフィール〕

はやかわ のりかず (31歳)

- ・ 1966年 名古屋市生まれ
- ・ 1989年 (株)松坂屋入社
名古屋店婦人L、Sサイズウェア
売場へ配属
- ・ 1993年 同 外商第三十三課へ異動
- ・ 1996年 本社人事部（人事担当）へ異動
現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女
- 〈趣味〉 音楽(70年代のブリティッシュロック、特にグラム系を好む)

一、人事という仕事

本社人事部に異動となつて、早くも二年が過ぎようとしている。二年前の辞令交付の瞬間の動揺は、今でも心に焼き付いたままだ。

入社後四年間は、当初の希望どおり、百貨店の花形売場とイメージしていた婦人服の売場に配属となり、イメージに反して肉体労働の日々が続いた。が、一方で「オバタリアン・キラ」と呼ばれ、接客の楽しさを実感できるようになつていった。その後三年間は外商担当員として、白地に大きく社名の入ったライトバンに乗り、知多半島南部を走り回っていた。一日に三百キロ程の走行距離となることもよくあり、潮風を受けながら健康的に日焼けをしていった。この頃、仕事が嫌になつた訳ではないが、元来の飽き性が災いしてか別の業務に就きたくなつた。売場・外商と経験し、若いうちに内務（事務）部門を経験することによつて、百貨店の全体像が見え、将来に向けてやりたいことが発見できるのではないかと考えてしまい、ある機会に人事課に対しその思いを伝えてしまった。

そして、二年前の異動。前日に辞令交付の時間が伝えられるので、本社勤務であろうという予想はついていた。期待通りの異動、しかも本社勤務だなんて格好いいな、なんて気楽に思いながら実際に辞令交付されると、そこに書いてあつたのは、何と「本社人事部」。

（「人事部？　なんだそれは。」）

目の前が真っ白になつた。月並みな表現だが本当に真っ白になつた。内務部門とはいつても、経営企画などの格好良さそうな部署しか頭になかつたので、正に寝耳に水、青天の霹靂だった。どんな人

達がそこで働いているのか、どんな仕事をしているのか、同じ会社の中にありながら殆ど得体の知れない部署へ配属となつてしまい、口は災いのもとと後悔したが後の祭りだった。

おまけに上司・先輩からはこんなお言葉も戴いた。

「人事という仕事は、企業に勤めていれば誰もが一度はやって見たいと思うものだが、実際に経験できるのはごく一部の人に限られている。だから、社内ですういう目で見られていることを常に肝に銘じておきなさい。」

「人事異動・昇進の時期が近付くと、同僚・先輩から色々と聞かれる。聞くほうは悪気はないと思うのだが、聞かれるこちらとしては気が重くなってしまうので、夜、酒を酌み交わす気にもなれない。」

「社内の人間は、人事の奴が向こうから歩いて来た、と思うと愛想良く挨拶をするが、すれちがいざまに振り向き、舌を出していると思ひなさい。」

今まではお客様と接し顧客満足を求め、売上・利益の達成を目指し仕事をしてきたので、あまりの変化に何とも言い表せない複雑な心境になつてしまった。

また一方では、こんな言葉も耳にした。

「長年人事関係の仕事をやってきたが、今でも自分はこの仕事に向いていないと思つている。」

「本当は人事の仕事ではなく、せつかく百貨店に入社したのだから、バイヤーをやりたいかった。しかし、今更この年齢では無理だから諦めた。」

そんな言葉を聞いて、この仕事に希望が持てる筈がない。そこで、諦めていても仕方がない、と与えられた業務に対する使命感に燃え、自分は本当は人事に向いているのだ、と暗示をかけながら業務

に就くことにしている。もともと思い込みが激しいタイプなので、意に反して置かれた状況に対して、意に沿っているのだと信じ切ること、葛藤が消え、その時点で周りから、おまえは向いていると言われるようになってしまった。良く言えば、順応性が高いということであろうか。

しかし、順応性が高いということは長所である反面、ややもすると欠点・マイナス要因に繋がってしまうのではないだろうか。周りの環境を受け入れ、自らがそれに合わせてしまうが故の問題意識の欠如。過去からの流れ、世間の動向をまず第一に頭に浮かべてしまう前例主義・横並び意識への偏り。旧来のサラリーマンであればよしとされてきたこれらのことが、今では逆に全く役立たないと言われている。「社内の常識は社外の非常識と思え」と言われ、その社外という言葉も日本国内を差すのではなく、今はやりの「グローバル・スタンダード」という言葉どおり、世界を差すものに変化している。また、従来の日本的雇用形態の象徴であった「終身雇用制度」「年功序列型賃金形態」についても、異論は様々あると思うが、なくなってしまうとまでは言わないまでも、大きく形を変えつつあることは紛れもない事実であろう。

このような社会の急激な変化に対応していくためには、順応性だけでは不十分であり、古めかしい固定観念を捨てた新しい価値観の創造が必要なのではないか。従来企業で評価されるタイプとしては、サービス残業をして猛烈に仕事をするといった狭い意味には限らないが、いわゆる「愛社精神」が強い者をよしとする傾向があったように思う。しかし、今叫ばれている能力主義（成果主義）というのは、批判されるのを覚悟で言うなら、愛社精神など全く必要のない、業務の結果だけを求めたものであろう。従って、そうなれば評価する側も従来の価値観を大幅に変えなければならない。

(しまった。内容が人事制度へ向かってしまっている。これ以上話を続けると、今この文章を読んでいただいている皆様に自らの勉強不足がばれてしまう可能性が非常に高いので、ここまでにしたい。)

二、ナシヨナリズム

昨年、サッカーの日本代表チームがワールドカップへの出場を勝ち取り、決定戦のテレビ視聴率は驚異的な数字になった。勝負事はやる以上は負けるより勝った方が良いと思っているので、まずは選手・関係者の皆さんを心より祝福したい。ただ、「産政塾」最終回のテーマでも取り上げられたが、Jリーグの最近の人気低迷ぶりから見ると、この盛り上がりは私自身以外であった。

そこで、マスコミの一部から「ナシヨナリズム」という言葉が出てきた。日本国内ではサッカーは野球などに比べると人気がなくなり、観客動員数も減り、テレビの視聴率も低くなってしまった。にも拘らず、「日本代表」という名のもとに外国と戦うとなると、普段サッカーに対する関心が低い人でも急に愛国心から熱狂的に応援してしまうというのだ。

確かにその感はあるが、だからといって歴史的にナシヨナリズムという言葉が使われる「戦争」を引き合いに出してしまうのは、余りに極端すぎるだろう。サッカーのワールドカップは、戦争のない平和な世界における戦争と位置付けている国もあるそうだ。確かに、国威発揚の場と考え国家をあげて参加している国もあるように見えるが、少なくとも日本はそうではない。多くの若者を熱狂させ、ナシヨナリズムを煽り、戦争へと導こうとする力は存在しない。

まもなく長野で冬季オリンピックが開催される。日本代表に選ばれた選手は、各々が目的を持って

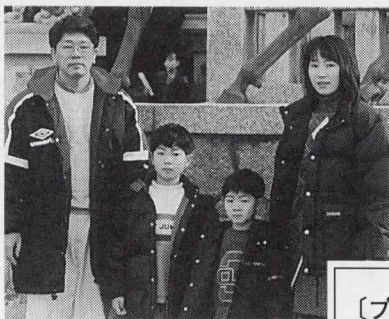
参加すればいいだろう。参加することに目的があってもいいし、世界一になることに目的があってもいい。ただ自分の目的を達成するためだけに戦って欲しい。そして、自分は目の丸を背負って戦わねばならないなどという、つまらない愛国心に振り回されたくないで貰いたい。マスコミにも、「あなたに日本国民全員が期待しています。」といった過剰な報道を考え直して貰いたいし、我々もそれに便乗して無言の圧力をかけることのないよう心掛けたいものである。

三、最 後 に

産政塾の第三回の企画は生涯忘れることができないだろう。というのも、訪問した暁学園が母校に隣接していたからだ。三年間通学し、毎日のように周辺を部活動で走っていたにも拘らず、その建物を目にした記憶もないとは。訪問して初めて学園から母校を見た時、自分の精神的な視野の狭さに落胆し、色々なことに打ち込んだ高校生活が、急に色褪せて見えてしまった。祖父江文宏氏の独特の言い回し、笑顔と共に記憶にとどまっている。

第八期産政塾の皆さん、そして中部産政研の丹羽さん、一年間ありがとうございました。お買物の際は、お気軽に呼び出してください。

脱 『惑』 —道半ば—



アラコ(株) 人事部

船 戸 正 巳

〔プロフィール〕

- | | |
|---------|-------------------------|
| ふなと | まさみ (37歳) |
| ・ 1960年 | 京都市生まれ (名古屋育ち) |
| ・ 1983年 | アラコ(株)入社 (当時、荒川車体工業(株)) |
| | 総務部配属 |
| ・ 1992年 | 人事部に異動 |
| | 現在に至る |
| 〈家族〉 | 妻、長男、次男、母 (名古屋市天白区在住) |
| 〈趣味〉 | マージャン、ギター、ラグビー |

前置きだけはさせていたきたい

要は、こういった類のものが好きだけど嫌いなのである。真面目に書けば書くほど、後々、読み返すと必ず自己嫌悪に陥る。過去にも、三日坊主と戦いながら日記みたいなものを綴ったことがあったが、ノートが一杯になると捨てていった。たやすく書けばいいと思うのに、つい重い内容になってしまう。この塾誌が発行されたら身を隠したい、今からそう思っている。

顔のない自分

いきなり重いタイトルから入ってしまい誠に申し訳ない。以降、話の展開は、こういう泥沼からは抜け出せないで、イヤな方は、後に続く人の寄稿へ移っていただいたほうが賢明である。

かれこれ二十年（学生の頃）、ことある度に（というほど頻繁ではないが）、自問自答してきた事は、「自分は自分のために生きているのか」「自分は人のために生きているのか」であった。元々、人間は世の中との関わり抜きでは生きていないし、そんなふうにくれた人は誰一人いないはずであるから、インプットが世の中だとしたら、アウトプットも世の中に対して行うべきである。更に、殻の外に踏み出せたとしてそこに何があるのかと考えた場合、それは、人格形成の最終目的は何かという問いになるが、答えは自ずと「世のため、人のため」となる。これが理屈のように思える。しかし、ホントニソウカ？どうしても、イマノアンタハナンナノ？になってしまう。それは、日常の自分を省みたり、

金や名誉みたいなこともあるし、人間は遺伝子の乗物でしかないという説もある。人は自分の死に場所を探すために生きているんだという人もいる。自分の考えがいつもハッキリせず、周囲に左右されやすいのは、この命題がどちらかわからないからそうになっている気がするし、一方で、ハッキリしないからこの命題が決まらないような気もする。ようするに自分の顔がない。

年老いた犬

顔がないというほど情けないものもない。先程の命題に対する迷いが、日常のアチコチで顔を出してしまい、自分の価値基準というものをなかなか持てない。人に良い影響を与える人間になりたいと思うが、自分の良いと思う事が人にとっても良い事なのか、すぐ迷ってしまう。極端な話だが、わかりやすく例えると、「道を尋ねられ、より近道を教えてあげたら、その道でその人が交通事故にあってしまった」なんてことが起きると誰が悪いの？と二の足を踏む。世の中との関わりなしでは生きていけないはずなのに、世の中との関わりを拒んでいる臆病な自分がいる。

かといって、そんな理屈を正当化して今のままであり続けると、あげくの果ては変な人格が出来上がってしまい、後で悔やんでももう遅い人生になってしまう危惧もある。諺にあるように、まさに、*“You cannot teach an old dog new tricks”*（年老いた犬には芸を教えるににくい）である。

なりたい自分

まだ私が中学生の頃の学級委員選挙の時のことである。当時の中学も既にイジメみたいなものが

あつて、学級委員は秀でた者を選ぶというのではなく、それに相応しくない者を選びコケにしようというムードが強くあつた。それを察知していた担任の先生は、「リーダーシップのある人を選びなさい。リーダーシップのある人とは、どんな時も一歩下がって全体をみることが出来る人です。」と言われた。誰が選ばれたかは忘れてしまったが、何気なく聞き過ごしたこの言葉が、後にめぐり合う二人の言葉と結びつき、今の私に大きな影響を与えている。

一人目は、あの田中角栄がロッキードで捕まった時のことである。一人の人間の逮捕劇に対し、世の中すべてが溜飲をさげ、歓善懲惡の世論がすぐ形成されたことは、大きなインパクトとして、皆さんも記憶のことと思う。当時、著名人のコメントもすべて、そうした世論をあたかも引っ張っているかのように同じ論調で塗りつぶされたのであつたが、ただ一人、プロ野球の監督として活躍していた広岡達朗のコメントは秀逸であつた。インタビューの「今回の逮捕をどう思いますか？」の問いに対し、一言「世の中そういうものだということですよ」と彼は言つた。当時の世論を無視するかのごとく、社会全体や人の生きざまを、自分の考えとして冷静に一言で言い放つた彼は、一歩下がって全体をみることのできるリーダーシップの持ち主だと感心した。

二人目は、数年前だったと記憶しているが、早稲田の学生がパキスタンを放浪（確か、川下りだった）していて、ダコイトとかいう現地人に拉致され行方不明になるが、数日後無事保護されたという事件があつた。その学生の記者会見が帰国直後の成田空港で開かれた際、学生が謝罪する中で使った言葉に「僕たちの判断の基準が甘かつた」というくだりあつた。無謀な連中だと思つてTVを見てい

た私であつたが、この言葉には少なからず感心した。「判断が間違つた」とか「甘かつた」という言い方はよくされるが、よくよく考えてみれば、これは実に曖昧な言い方で、自分というものを極めて抽象的にしか反省できない言い方だと気づいた。それに対し「判断の基準が」と言える彼らは、おそらく精神的余裕などなかつたであろうTPOの記者会見にあつても、冷静に自己分析し、次の対策につなげられる素養を持っている人だと思つた。

そういう冷静な判断のできる人間になれば、私の価値基準もしっかりと整理され、芯の通つたものとなり、それがリーダーシップの發揮につながつて、人のためになるのではないだろうか。

大切なモノ

人との関わりの中では必ず評価というものが根底にある。その人を自分の基準で評価して、その人との距離感をつくり、コミュニケーションをとる。人事上、最も難しいとされることの一つである評価が、人との関わりの大きなベースとなるのであるから、考えてみれば恐ろしいことである。きつと誤解だらけだろうし、十言つて六伝われば上出来の世界であろう。コミュニケーションなんて、誤解のぶつかり合いと解消の繰り返しなのかもしれない。

間違ったコミュニケーションのためには人間観察力みたいな能力が必要であるが、そんなものは、私にはまだまだない能力であり、とすると、人と関わる（コミュニケーションをとる）ための、その人に対する評価基準をいち早くつくりあげるためには、相手の情報（人となり、信条、生活パターンや水準その他諸々）をいかに沢山持てるか、にかかつてゐる。つまり結論的には謙虚でなければな

らないのである。謙虚こそ、今の私にとって、世の中と関わるうえでの最良の方策なのである。実つてなくても、コウベを垂れる稲穂かな、でいきたい。

おわりに

こうやってペンを運んでくると、人のために生きる、が答えのようになってくるのであるが、どうしてもその後に「でも……」がついてくる。「自分のため」と「人のため」、どちらかが手段でどちらかが目的である、というところまではハッキリしているのだが、その先が不明なのは相変わらずであり、そうしたやすく答えが出ないことは百も承知である。ただひとつだけ、最近、「自分の生涯を振り返る時、I was something でなく、I did something であることが大切だ」という話を聞いた。少しだけモヤがとれた気がする。

こんな瞑想は何かコトがないと考えないのであって、やっと四〇〇〇〇字に辿り着けたので、これでもたお気楽な毎日に埋没することになる。しかし、それにつけても、この原稿、やぶり捨てたい。

「変わらなければ」



丸栄労働組合

前田 孝 広

〔プロフィール〕

- まえだ たかひろ (39歳)
- ・ 1959年 名古屋市生まれ
 - ・ 1982年 株式会社 丸栄入社
 - ・ 1993年 労働組合専従
現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女(10歳)、次女(8歳)
- 〈趣味〉 テニス、読書

一枚の絵

ここに一枚の絵がある。あるといっても、実際に目の前にあるのはその実物ではなく、美術書に紹介されている作品の写真にすぎない（実物が見られたらどんなにか素晴らしいだろう）。しかし、絵があるといつても、これは本当に絵と言えるのだろうか。

ここにあるのは、一九五八年に発表されたジャスパール・ジョーンズ（アメリカのモダンアート作家の一人）の「三枚の星条旗」という作品。アメリカの国旗そのままを描いた四角いカンヴァスの中心に、それをそのまま八〇％程縮小した同じものが張り付けられている。さらにその上に、またそれを八〇％縮小したカンヴァスがまるごと張り付けられていて、合計三枚の大小のカンヴァスでこの作品は成り立っている。

これが一枚のカンヴァスに描かれた星条旗であれば、誰も何も驚かないし、注目もされなかっただろう。描かれた絵に意味を求めようとしても、星がアメリカ合衆国の州の数であり、赤と白の横帯が独立当時の十三州であることを意味している程度で、せいぜい深読みしても、この国旗が象徴するアメリカ合衆国という国が世界で最も影響力を持つ国であるということぐらいだろう。

この作品の持つ意味は、これを三枚重ねたことにあると思う。一枚だけでは単なる日常的にある国旗の模写。それが重ねられたことによって、その日常的な意味すらもなくなる。

これまでに絵画は二次元という平面の上に、三次元の事物を描くという矛盾を克服するために、膨大な時間を費やしてきた。その中で遠近法が生み出され、見る側の人間の錯覚を利用するという方法

もとられてきた。

しかし、この作品はあくまでも絵画を平面として扱い、それを重ね合わせることによって三次元化するという手法を採っている。まるで「無理してカンヴァスに三次元の世界を作り上げる必要はないんだ。絵画は所詮二次元のものであって、そんな事で悩むことに、もはや何の意味もないんだ。」と言っているようにも思える。

現代芸術では、以前からカンヴァスに「オブジェ」を張り付けたり、「厚塗り」して立体化し、そこに指やナイフで傷を付けたりするということも行われてきた。しかし、この作品はまさに絵画そのものと言えるカンヴァスを使って、そういった試みを行ったところに意味があるのだろう。そのために、あえて分かりやすい星条旗をモチーフに使ったとも思えるが、ここでは描かれた星条旗そのものの意味さえ消えてしまいそうだ。

芸術の改革者達

これまで絵画といわれる芸術の一分野では、様々な改革が行われてきた。十四世紀初頭のジョットから始まるとされるルネッサンス期の芸術家たちは、中世まで彼岸にいた神を再び日常の世界に引きずり降ろすと共に、遠近法を完成させた。

十九世紀後半のモネやルノアールを代表とする印象派の画家たちは、色を光としてとらえ、カンヴァスを光の洪水で満たした。マリネットイなどの未来派の作家は運動のダイナミズムを表現するために、走る犬の足を見えるがまま実際の数より多く描いた。セザンヌを始祖としピカソなどを代表とする立

体派は対象を円筒と円錐と球とに分解し、マティス達フオービストは形よりも色を全面に押し出した。カンディンスキーは点や線や面による抽象絵画を生み出し、デュシャンはダダを唱えて、それまでも、また現在においてさえも芸術の代名詞である「モネリザ」に口髭を加えた。さらに、ダリはシュールレアリスムによって無意識の世界を描き出した。

それぞれの時代に様々な芸術家達が、目的を持って意図的に、または己の感性の赴くままにそれまでの既存の芸術を改革してきた。

芸術がジョークか

かつてマルセル・デュシャンは、展示会に既製品の便器を《泉》と題して出品した。当時は大変な物議を醸し出したという。「これが芸術なのか」と。

我々がもしもその時、その場所に居合わせたとすれば、その作品を見てどのように思ったのだろうか。おそらくこう言っただろう。「これは一体何なのだ。どこからどう見ても便器としかみえない。

私はここに芸術を見にきているのだ。これはジョークなのか。」と。

しかし、作者はこう反論するだろう。「皆さんは、もしここにあるのが便器でなく人物の彫造であれば芸術だと納得されるのだろうか。真つ赤なリングや熟したブドウが描かれた絵があれば、それはまさしく芸術作品であると思われるだろう。しかし、果物を描けば芸術で、スープの缶を画けば芸術ではないのか。人物彫刻が芸術で、便器であれば芸術ではないのか。」

変わらなければ

見る側の「これは一体何なのだ。」という一瞬の驚きや戸惑いや判断停止が、まさに作者が意図したものであると思う。今まで当たり前と考えていたところに、異質なものが入り込んで来て意義申し立てをする。作者は日常にあるもの、芸術とは対局にあると思われる既製品をあえて使うことで、それまでの芸術の既製概念を壊そうとした。「芸術とは何か」を改めて問いかけたと言えるだろう。

以来、芸術と言われる世界は、アメリカを中心としてポップアート、コンセプチュアルアート、アースワークなど様々に変化してきている。しかし一方で、私たちは依然として昔ながらの古典的な作品を見て感動するし、それらを芸術作品であると認めている。従来通りの美意識や感覚、芸術観を失ってはいない。それほどまでに今まで積み上げられてきた既製概念は強い。

でも、少しずつではあるけれども変わりつつある。「芸術とはこういうものである。」「芸術はかくあらねばならない。」といった考え方は崩れてきている。

あるフランスの学者が語ったように、一つの文学作品は飢えている子供達の前には無力である。同じように一つの絵が世界を救うこともあり得ない。

私たちを取り巻いている世界も容易には変わらない。その中にいる自分自身が最も変わりにくいものとも言える。しかし、世界の政治、経済、思想は私たちの見えないところで刻々と変化している。私たちが変わらないのは、その変化に気付かないか、気付こうとしないからなのだろう。

変わらなければいけない。既製概念を取り払うためには、変わろうとする努力と、外へ出て行こう

とする情熱と、異質なものを取り込もうとする意志が必要だ。芸術はそれを一番分かりやすい簡単な方法で示してくれている。

『最近思うこと』



トヨタ車体労働組合

前 田 直 人

〔プロフィール〕

まえだ なおと (33歳)

①出身地：三重県

②生年月日：1965年2月8日

③家族構成：妻，子供(女の子)3名の5人家族

◎ はじめに

今年の二月で三十三歳の誕生日を迎えた。人生八十年と言われる時代においてはまだ半分も過ぎしていない。ほんの少しこの三十三年間を振り返ってみると三重県の田舎の地に生まれ小学校、中学校を卒業し、高校へ進学した。高校では勉強というよりはバスケットボールに明け暮れ比較的充実した学生生活を送った。そしてトヨタ車体に入社し、六年後に結婚、今では女の子三人の父親となり、結婚十一年目で安い家も買った。と、まあ普通の人生を平凡に送り現在に至る。しかし、この三十三年間で世の中もずいぶん様変わりしてきたように思える。自分自身が変わった訳でもないが、少なからず生活環境が変わり、また、物の見方・考え方も多少なりとも変化してきたのかなと感じる瞬間もある。今回の塾誌「産政塾」の発刊にあたっては取り立てて特にこれといったテーマはないが、『最近思うこと』というタイトルで二つのテーマについて気の向くままにまとめてみた。取り留めのないものになってしまいそうだが、ご勘弁願いたい。

テーマ1：自己選択・自己責任

最近、長女（小学校三年生）が習い事に行き始めた。習字とピアノ教室。習字は学校の友達の影響もあって自分自身が志願し、また、ピアノは過去、一度は習いだったが基礎教育（譜面の見方、指の使い方など実技練習がない）に根を上げ挫折、しかし、関心だけは持ち続けていたのか時同じくして志願してきた。長続きするかどうかわからないが、今回は相当本人の意思も強く自分が決めたならば

やむを得ないと習い事に行かせることにした。夫婦の会話の中で子供の教育について話をする場があるが、その中で月曜日から金曜日まで習い事や塾通いといったハードなスケジュールをこなしている子供もいるらしい。親が進めたのか、子供自身が志願してきたのか、友達の影響なのかさだかではないが。自分の実家では習い事や塾というものは、ほとんどなく勉強よりも遊びに夢中になっていたのが実態だ。習い事や塾自体、興味のある時に自分から志願してきたのであればやらせるべきだとは思うし、特に否定はしない。

ところで最近、「自己選択・自己責任」といった言葉をよく耳にする。自らが選択し、自らの責任において物事を成し遂げる。「自分の道は自分で決める」、このような姿勢を子供の時から身につけておけば、必ずや自分が成人した時にプラスになるのは間違いない。また、それは、大変重要なことであり「自己選択・自己責任」で自分の進むべき方向性を子供が見極めているのであれば私も含め大人もそれを見習う必要があるように思える。

話は変わるが、私自身、少し前に仕事の関係上、「自己選択・自己責任」という言葉を耳にしたり言葉で発したことがある。それは、「保険」についてである。「保険」も仕事をする機会がない限りたぶん無関心で保険セールスマン（保険セールスウーマン）の言うがままに、「これが適切なんだ」と軽く考え加入していたと思う。言わば他人任せで加入していたのが実態である。しかし、仕事を進めるにあたっていろんな場で「保険」についての話を聞いたり、疑問を解消していくうちに少なからず興味・関心を持ちはじめた。そして必然的に自分の加入している「保険」の種類・保障額などを専門家のアドバイスも聞き入れながらチェックし、自分にあつた適切な保障内容に見直すこととなった。

（無論、今でもほんのカジリ程度で偉そうなことは言えないが。）という具合に何か事を成す、現状を明らかにしてそれを正すといった行動に移すためには、キッカケはいると思うが、キッカケがあつても自分自身が行動に移さないと何も変わらない。自分が行動に移すか否かは「自己選択」で、それが招く結果は当然、「自己責任」である。子供の習い事・塾と「保険」とは無縁だが、人の心の構造というか心理というものは同類で、「自己選択・自己責任」というものは、どの分野・場面においても全てではないが個人が「何かやろう」「何かを見直そう」といった自発的な心の動きの基本的なスタンスではないだろうか。そして、そのことが、ひいては自分の価値や生涯のクオリティーを高めるにあたつての重要なキーワードになるような気がする。「自己選択・自己責任」これからも、長い付き合いになりそうだ。

子供の習い事から大きく脱線してしまつたが、ところで、習い事・塾もいいが子供の友達同士のコミュニケーションを考えると放課後、一緒に遊ぶ時間というものは重要ではないのかと思う。一週間連続の習い事・塾通いでは友達と遊ぶ時間すらないのは。日曜日の夕方にテレビで放映されている「サザエさん」を見ていても「カツオ」は、学校から帰つて来るや否や友達と野球に夢中になつて宿題なんかそちのけで習い事や塾に関する会話も出てこない。（当たり前かも知れないが）これが、本来の子供の姿なのかなという感じさえもする。ダラダラとまとまりのない文章を書いたが、冒頭の子供のピアノと習字の習い事、「自己選択・自己責任」で子供自身が選択したもの。今は、エールを送ってあげたい。

『フレー・フレー』帆乃香“!!”

テーマ2：『想いなはれ』『想いなはれ』

会社に入社して十五年が経過した。取り立てて障害もなくむしろいろんな人との出会いやその人達からのアドバイス、職場との出会いがあり、充実した十五年間を過ごしてきたように思える。現在、私は労働組合の専従執行委員をやらせてもらっている。労働組合の活動の原点は「職場の声」と言われるように、執行委員になって『人』に接する機会ひいては話す機会は職場にいた時に比べはるかに多く吸収すべきもの、反省すべきもの、考えさせられるものが数多くある。それは、自分の成長の未熟さから来ているものでもある。その度に自分の言動や行動を振り返ることがある。過去を振り返っていてもしょうがないがこれからのことを考えるとそれも重要なことではないかと思う。

話は変わるが、産政塾で松下政経塾への体験入学をした。以前から「松下幸之助」という名前や物の見方・考え方などの哲学・思想的なものを聞いたことがあったが、その体験入学で一層、興味を持った。

ある日、近くの本屋に行って何気なく「何か面白い本がないかなア」と本を探していたら目の前に飛び込んできたのが「松下幸之助」の文字だった。その本は、「松下幸之助の1日1話」というタイトルで中身を見ると一年三百六十五日、毎日一小説づつ読めるようにひとつのテーマについて「松下幸之助」の哲学・思想的なものが書き記されてある本だった。興味もあつたせいか本を購入することにした。じっくり本を読んでもみると『仕事』や『人』などに対するケース・バイ・ケースでの、ものの考え方、心の持ち方、問題に直面した時の対処の仕方などが、うまく表現できないが「問題を問題と感じさせない」「慎重に物事を動かそうとしているが実は大胆に責めている」というか、まあ、読

むものすべてが自分の胸に強烈に飛び込んできて、どれも「なるほどな」と感心させられる。まるで自分が何か小さな世界の中で物事を見て聞いて考えていることに、「もう少し大きな世界でやれ」とメッセージを訴えているようにも思えた。

ところで、企業の中に置かれた『人』に対するスタンスを代表的なものと見てみると「事業は人なり」「物をつくる前に人をつくる」という言葉ではないだろうか。いかに立派な歴史があっても、それを維持・向上させるのは『人』、どんなに優れた設備があろうともうまく使うのは『人』、新しい事業を興すのも『人』、会社が発展するするにも一に『人』という具合に一貫した『人』に対する執着心が何事にも最優先で絶対的なものとしている。企業の原動力はまさに『人』であると。フムフム。

冒頭に述べたように労働組合の活動も『人』の行動や言動、心の動きなどをタイムリーに捉え、場面場面において最適な手段と選択で組合員の気持ちを一いつにして直面した問題・課題に立ち向かい、それをよき方向に導き出すのがあるべき姿なのではないか。しかし、言葉ではわかっているが1人の力ではできないし、それは極めて困難で並大抵のエネルギーでは、実現できない。ましてや執行委員としてもまだまだ未熟者の自分は、到底その域には足元にも及ばないが。今後いろいろな『人』との出会いや経験の中、吸収すべきものの、反省すべきものの、考えさせられるものが必ずある。しかし、それは、自分を成長させてくれる貴重な財産でもある。

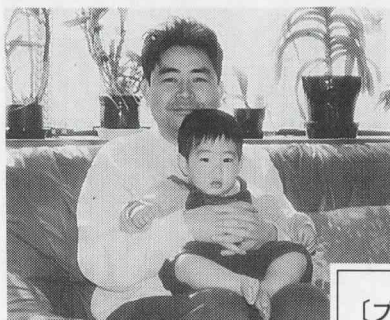
以上、まとまりのないものになったが、いずれにせよこれから「松下幸之助の1日1話」を読んで頭の中を極力クリアーな状態にして、間違ひなく反省し続ける毎日を生涯の教訓として捉え、それを明日へのエネルギーに変えて一歩でも二歩でも着実に前進ができるようがんばっていこう。いや、

がんばっていきたい。……………しかし、現実には、厳しいだろうな？。
いやいや、『想いなはれ』『想いなはれ』。

ま と め

『最近思うこと』というありきたりなタイトルで気の向くままに二つのテーマで以ってダラダラ文字をならべてしまいました。意味不明な点が多々（いや全然わからない）あることをお詫び申し上げます。

2001年、夏



トヨタ自動車労働組合

百瀬和典

〔プロフィール〕

- ももせ かずのり (35歳)
- ・ 1963年 長野県松本市生まれ
 - ・ 1986年 トヨタ自動車入社
補給部品の物流を担当
 - ・ 1994年 労組専従
それまでの無関心を恥じ、現在、
政策制度に熟中
- 〈家族〉 妻（美由紀）、長男（雄紀）、
次男（大軌）、ビーグル犬
- 〈趣味〉 家族の機嫌とり
- 〈望み〉 八ヶ岳での晴耕雨読の暮らし
- 〈懸念〉 結論を急ぐ風潮、日本語の軽視

『新谷始のある夏の朝』

西暦二〇〇一年。真夏の朝のさわやかな太陽が、まるで希望に満ちた二十一世紀を祝福するかのようにはっきりと降り注いでいる。新谷始（あらたに・はじめ）四十歳は、やや寝不足気味の目をこすってからひとつ背伸びをし、庭の芝生に水を撒き始めた。今日も暑い一日になりそうだと思いきや、しかしそれが今日は心地よく感じた。

昨晩は、二十一世紀初の参議院選挙が開票され、活力ある公平な社会づくりを目指す「明日香」が大勝し、一方、利権と恐怖政治で政・官・業を牛耳ってきた保身党が大敗した、新谷にとつて実に痛快な夜となった。おかげで新谷は、夜更けまで二十一世紀の今後に思いを寄せながら、つついづいグラスを重ねてしまった。

この選挙は様々に時代の転機を象徴するものであった。まず、公職選挙法が改正され、定数は半減され、良識の府と位置づけられる参議院では、それまでの比例代表制は全廃され、議席は全て候補者名で投票されることになった。併せて、民意を直接的に問う衆議院は今後、政党色の濃い投票方式が強化されることになっている。そして開票のシステムも変わった。投票期間は一週間設けられ、電話のボイスサービスやEメールでの投票が導入された。また、選挙運動に関する制約もそれまでつぎはぎされていたものが体系だつて一新され、透明性が増したことで、キャンペーンがより身近で活発なものとなった結果、投票率は七〇%を超え、選挙は国民の一大関心事となった。その結果、六年前の選挙では当時世論を二分させた博覧会開催の問題で、自然保護を理由に開催反対を唯一の政策に掲

げ、開催予定地に立つクヌギの木を一本買い取るというデモンストレーションまで行い、浮動票を取り込んで当選した挙げ句、国民の猛烈な抗議にも耳をかさず保身党に鞍替えしてしまったタレント議員が、永きにわたってしがみついていた議席から、実に六年の歳月を経てようやく引き摺り下ろされた瞬間でもあった。

新谷は、ホームオフィスとして登録してある自室に戻ると、ネットメールに目を通し、決裁済みの書類を会社に電送した。それを済ますと今度はバーチャルモールにアクセスし、さんざん悩んだ末に妻へのバースデイプレゼントを注文した。次に銀行振り替えのボタンをクリックし、注文先への分と自分のICカードへの分とを送金依頼して終了だ。新谷の妻は情報システムの進歩によって在宅勤務できることを喜び、薬品の検査技師に復職した。昨晩は定例のミーティングの後、創立記念パーティーに出席したため、今朝はゆっくり寝ているようだ。

二十世紀末の国民的大議論の末に徹底した行政の見直しが行われ、また、かつては保護産業といわれた業界の努力によって、今では内外価格差などという言葉も死語になりつつある。結果的に、強く懸念された国民負担の急上昇はすんでのところで免れ、それほど負担感のない暮らしが実現できた。少子高齢化によって就労人口が減少したことが主婦層の社会復帰のきっかけにはしたが、実のところ世の多くの妻が働く背景は、今ではむしろ自己実現や社会参加といったポジティブなものだ。これは家庭内を明るくし、在宅勤務を積極的に指向する大きな追い風となった。

新谷はICカードを抜き取るとディスプレイから離れ、愛車に乗り込んだ。始動の際、わずかにモーター音と振動が感じられるだけで、電流計を見ない限りエンジンがかかっていることが感じられない

ほどだ。いわゆるエコカーに対する各種優遇措置が功を奏し、今ではモーターとガソリンエンジンのハイブリッドを軸に各種のエコ動力が普及し、エンジンという表現さえ少し居心地の悪い思いがする。すぐ近くのコンビニに立ち寄り、妻へのバスデイクードと切手を買ひ、自筆でメッセージをしたため、日付指定で投函する。それからカップコーヒーを買うとICカードで支払を済ませ、一口すすってダッシュボードのカップホルダーに収めると、早朝の海へと向かった。

まだ人の疎らな海岸沿いに愛車を走らせながら新谷は考えた。思えばあの時が転機だった。二十世紀末の国民的大議論。その結果、今ではどのコンビニでも、切手も買えれば解熱剤も買える。夜中に子供が発熱したときなど、本当に助かる。それにしても、できてみればなんでもないことが、あの時はなぜあんなに大変だったのだろうか：

車に備えられた端末がメールの着信を告げ、新谷は自宅へとアクセルを踏んだ。

『古井守のある夏の朝』

二〇〇一年、ある夏の朝。既に、嫌になるほどの暑い陽がギラギラと照りつけている。今日もまた、うだるような一日の始まりだ。古井守（ふるい・まもる）四十歳は、ダルさの残る身体を無理矢理ベッドから引きずり出すと、ふわあーっとあくびをした。

面倒くさそうに朝刊を広げると、そこには昨晩開票された参議院選挙の結果が大々的に報じられていた。古井には関係のない話だ。少なくとも本人はそう思っている。誰が当選し、誰が落選しようと、この世の中が変わるわけでもないし、もったいいえば誰が当選するかさえ、開票前からわかっていたこ

とだ。それを相いも変わらず三面も使つて報じるマスコミにも嫌気がさしている。昨夜だつてどのチャンネルにあわせても出てくるのは、万歳と最敬礼のオンパレードだ。

しかし、国民のほとんどが気にしようにしまいが、事実としてこの国の政治は着実にむしろ悪化している。政治家が悪い、国民はそれを見限っている、とのマスコミの論調が読者に心地よく受け容れられ、有権者の関心は極限まで低下した。今回の選挙では、あれほど議論された選挙制度改革も結局は見送られ、投票率も過去最低を更新し二二%となった。豊富な資金力と脅迫に物を言わせた保守党が議席を伸ばし、その当選者には、収賄疑惑でさわがれた議員や、公約をいとも簡単に翻して世間を騒がせた議員が名を連ねた。一方では、国家の存立や産業経済の発展などおかまいなしに、大衆受けだけを狙った共産党は、主義主張はないが投票には赴くという一部の国民にわかりやすさが受けて、大躍進を遂げた。その陰では、両者に挟まれ、それまでまじめに取り組みながらも、無関心な国民に支援を受けられず敗退した政党があつたが、気づいたものは少なかった。

古井は、テレビも新聞も見ざるべきものがないことに助けられ、いつもよりはほんの少し余裕をもつて通勤の途に就いた。余裕といつても、いつもは文字どおり息を切らせて滑り込みセーフ、というところだから大したことはない。妻はとうに夫の給料への期待を捨てて、家計を支えるため、既におもしろくもないパートに出かけた。結局また朝飯抜きだ。地下鉄は相変わらずのスシ詰め、化粧の匂いと体臭でムツとする。つりビラには、もう何年も見続けた記事の広告だ。公団役員がどうした、こうした。ウルグアイラウンドが増額されたとか何とか。

それにしても、我が日本はこのままどこへいくのだろう。ふと、古井にしてはめずらしく、まとも

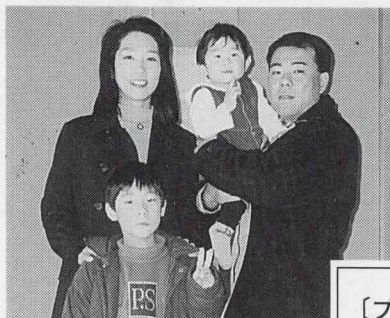
なことを考えた。電力や通信など、業界の努力で飛躍的に下げられた料金も、国民の後押しがなく、再び上昇カーブを描きつつある。環境対策に莫大な資金を投入した各業界も息切れしてしまった。車など、いい例だ。各社がこぞって赤字覚悟で発表したエコカーは国民的盛り上がり欠け、軒並み失敗した。景気後退が続く、ユーザーの代替えサイクルが長引いたことで、関連産業も含めて大打撃を被った。おかげで今では貿易摩擦などというものは歴史の一ページとして記録されているだけで、為替は1\$300円を前後している。海外旅行者も個人輸入もすたれた。また、社会保険料は急上昇を続け、健康保険や厚生年金は相次いで破綻した。古井の勤める会社もそのひとつだ。かろうじて倒産を免れているのだけが救いだ。といつても、古井は二度のリストラを経験し、この会社で三社目だ。前の二社とも、求心力が低下した労働組合が存在意義をなくし、解散してしまった。これは全国的な傾向で、リストラという安易な建て直しを選択する企業が増え、企業体力はますます衰えてきた。そして古井は思った。あのとき古井も、組合役員のなかに入らない奴がいて、組合解散に賛成したが、誰が役員かは二番目の問題で、その会社に労働組合があるという事実が大事だったと。そして、こうまで政治を墮落させたのは結局は国民自身ではなかったかと。この会社にいるのも長くはないかな。ふとよぎった思いがだんだんと確信になりつつあることを自覚しながら、古井は満員の地下鉄から吐き出された。

完

いやあ、面白かった。ここまで付き合って読んでくれる人はいないでしょうが、書く側は面白かった。こんな機会を与えられた産政塾に感謝し、ますますのご発展を祈ります。

一九九八年一月。

バック・トゥ・ザ・フューチャー



アイシン精機(株) 人材開発部

森 本 浩 二

〔プロフィール〕

- もりもと こうじ (33歳)
- ・1964年 名古屋市生まれ
 - ・1989年 アイシン精機(株)入社
現在人材開発部に所属
- 〈家族〉 妻 (33歳)、長男 (6歳)、
次男 (1歳)
- 〈趣味〉 麻雀、絵画・映画鑑賞

「バック・トゥ・ザ・フューチャー」——主人公のマーティが、科学者である親友のドクが発明したタイムマシンに乗って、過去と未来を自由に飛び回り、自分の都合のよい未来に造り変えていくという自分勝手極まりのないハリウッド・ムービーの話である。

しかし、この話を妙に覚えているのは、話に登場してくるタイムマシン「デロリアン」のせいかもしれない。時折、子供のように「タイムマシンがあつたら」とふと思うことがある。

これまで生きてきた人生に、とりわけ後悔、不満があるわけでもないが、自分の心の奥には、身の程知らずの夢の火種が燐り続けているようだ。

先日、我が家に学習机とランドセルが配達されてきた。長男がこの春、小学校に上がるので祖父母からの贈物である。私でさえ机ももっていないのに子供のくせに少し生意気だ、と大人げなく思ったが、親バカなので、有り難く頂いてしまった。

提出期限を気にしながらワープロを打つ私の足元で、じゃれ合っている二人の子供たち。顔が私にそっくりだ。紛れもなく私の子供なのだが、自分の子供がもう小学生かと思うと嬉しい反面、何だか妙な気持ちである。先日、家族になったばかりなのに、知らない間に六年もの歳月が、どつと滝のように流れてしまっている。妻に言わせると仕事人間である私には、これまで家族という存在をあまりに当然のもののように考えてきたのではないか。

今まで生きてきた人生を振り返ってみると（たかだか三十三年ではあるが）、人生の分岐点と思わ

れる通過点をいくつも通り過ぎてきた様に思う。その都度、自分で考え、決断し、コマを進めてきたつもりである。幾つもの選択肢の中から一つを選び、更にその先で枝分かれしている分岐点を幾つか越えてきた。その結果が今の私である。途中の分岐ジャンクションで、生涯を供にするであろうパートナーが同乗し、更にその先のジャンクションで一人増え、二人増えた。

妻について言えば、当人の分岐点で自分が考え、決断し、同乗したのだから、その後の人生においては、本人の責任の範囲内であると無責任に言い放つこともできるのだが、子供においてはその限りではない。本人の好むと好まざるとに関わらず、同乗させられてしまうのである。この先、幾つの分岐点まで一緒にいられるかは分からない。何十年先か或いは何ヵ月先かもしれない。しかし、いずれくるであろう、子供たちの人生の選択の場面で、より良い道に導いてやることが同乗者である私の使命であると思う。正しい選択と決断ができるように、その時がくるまで見守っていてやりたい。

執筆中に行き詰まりふと目をやったテレビのコマーシャル。アメリカの人気俳優ブラッド・ピットがジーンズの宣伝に出演していた。「この人とお父さんとどっちがカッコいい？」何気なく尋ねた私の質問に、「この人、お父さん程カッコよくないよ」と迷わず答えた息子。やはり、その時がくるまでこのまま見守ってやろうと思う。

しかし、子供というのは本当に不可解な生き物である。これは、人それぞれ、個々人によっても違うのだが、価値観が違う。いや、違い過ぎて理解の範囲を越えている。少々前の話だが、何十個もの蟬の脱け殻を大事そうに引出しにしまいこみ、粉々になったら、おかかふりかけにしてご飯にふりかけると言う。サンタクロースの存在を信じて疑わない純真さをできることなら少しでも長く見守っ

てやりたいと思う反面、もしタイムマシンがあつたとしても幼児期には戻るまいと思う。

父親、母親、子供達、それぞれが違った価値観をもち一緒に暮らしているのだから衝突がないわけがない。配偶者について言えば、選択の段階でできるだけ似通つた価値観の相手を選べば夫婦間のトラブルも最小限にとどめられるだろう。しかし、衝突を日常とする我が家では、平和に見える穏やかな日々こそ、不気味でならない。

成長過程で培われてきた価値観、好みというものは、そう簡単に変わるものでもないし、かえることができないものでもない。そういった意味で、結婚は妥協と諦めの連続と言えるかもしれない。

力関係の明確な親子の間では、有無を言わず、親の価値観や好みを押しつけてしまいがちである。息子も私がそうであつたように、絵を描いたり観たりするのが好きである。見た目だけでなく好みまでも何となく似かよっているのはそのせいであろう。しかし、自分と同じような人間になつて欲しいと願う親は少ないのではないか。私もできることなら、悪い習癖は受け継がず、良い部分だけで純粹培養したような大人になつてほしいと思う。

私にはとりたててこれといった才能があるわけでも、人より秀でた特技があるわけでもない。確かに人よりは、いや、かなり体重は重い。しかし、ごく普通に学生時代を過ごし、社会人になつた。共通一次で大幅にダウンした悲惨な浪人時代、麻雀に明け暮れた大学時代。一見無駄に思えるその時間の中で、失つたものは大きい。しかし、その中で得たものは、それ以上に大きくかけがえないもの

である。

何故か私は昔から友人に恵まれている。一生付き合っているであろう友も幾人かいる（向こうはそうは思っていないだろうが）。友人だけではない。会社の上司、同僚、その他私の回りは善人ばかりである。お人よしと言われるかもしれないが、本当にそう思っている。私の人徳の成せる技かとい瞬考えたこともあったが、それはどうも勘違いらしい。――妻の弁では。

ともかく、人間関係――人との繋がりは、大切にしていきたいと思うし、そうしてきたつもりである。又、私に誇れるものといったら、それくらいしかないであろう。自分でも不思議に思うが、いつも回りの人に支えられ、助けられてきた。教わることも多い。全く恵まれていると思う。

家を新築するために宅地を探しているのだが、なかなか思うような物件がみつからなく苦勞している。Tホームの営業マンにも頼んであるのだが、まだみつからない。先日、彼がうちの玄関先で、「足で歩いて、情報をもたらってきます」と言っていたのを思い出した。不動産業界のことはよくわからないが、中には「顔をよくみせる人にしか情報はやらない」というタイプの人もいる様だ。

そういえば、彼はFAXも郵便も使わない。必ず足で歩いて「手渡し」である。そのため「毎日その日のうちには帰れませぬ」と笑っていた。入社一年目の彼に、忘れていた大切なものを教わったような気がした。FAX、携帯電話、インターネット、どれも人とのコミュニケーションをとるための便利な道具である。しかし、それらが便利になればなる程、人とのつながりがかえって希薄になっていくのではないだろうか。言い換えれば、人とのつながりを保つことが難しい時代なのかもしれない。

い。彼は十年後、二十年後、どんな営業マンになっているだろうか。

会社の保養施設の建設・運営に二年間携わったことがある。その時知り合ったシェフとは、仕事を離れた今でも交流が続いている。企業の中にいる我々と彼のいる料理界とは、価値観という点で異質の文化であったのは、私にとって驚きであった。客に対するサービス精神は止まる所を知らず、熱意以上に執念とも言える仕事ぶりは、紛れもなく職人と呼ぶに相応しいものである。現代人に欠落している大切なものがそこには確かに存在していた。一芸に秀でた人物に教わることはとても多い。

仕事を通して、又日常生活の中で色々な人との出会いがあった。人との出会いは、偶然、運命といった因縁めいたものの存在をそこに感じるが、その出会いを受け止め、繋ぎ止めておくことは、本人の心掛け次第かもしれない。常に驚きを素直に受け止める謙虚な態度でありたいと思う。

最後に、私自身どんな人生を歩んでいくか全くわからないが、子供達に人生の先をいくものとして、人は人との関わりの中で成長していくものだ、ということを教えてやりたい。又、人生の分岐点でどう進むか迷った時に、私の人生を豊かにしてくれたものが何であったか、教えてやりたい。

デロリアンに乗って、もう一度人生をやり直すチャンスがあったとしても、私はもう一度同じ人々と同じ人生を歩んでいるかもしれない。

産政塾の裏話

中部産政研 丹羽 研次

当期（第八期）より歴史と伝統ある「産政塾」の事務局を担当した者として、裏話を少々綴ってみよう。断っておくが、この裏話の読者のターゲットは塾生であるとの前提としたい。派遣元の中部産政研の役員を担っている方々や塾生の上司の方々は読み流していただくことをお願いする。

私は産政塾に関しては、これまで労働組合の役員として見聞きしており、今回からの担当に際しては特別な想いも不安も正直なかった。中部産政研に着任早々、第八期の産政塾をスタートするにあたり、コンセプトは「なんでもあり」の精神の基、塾生を募り、開塾し、各回の開催案内をし、塾生が集まれば八十五点の成果と考えていた。現在もそう思っており、無責任と言われてもこの考え方は変わらない。弁解となるかどうかは別として、この産政塾は、「発起した方のアイデア」と「派遣各団体の姿勢」と「これまでの塾生の資質」とがバランスされ、伝統となり、既にかなり商品価値の高いものとなっているということである。したがって、八期の活動をだらだらと反省しても、せいぜい十五点分の評価範囲である。

「振り返って」よりも、塾生の皆さんへの裏話として綴ってみた。

第一回の会合（開塾式）は十二月に実施した。二十二人の塾生は当然のことながらそれぞれは初対面で、せいぜい企業の労使で参加している方が面識のある程度だ。いろいろと考えたあげく、開始十分をウェルカムパーティ（飲み物とお菓子）とボードへの自己紹介の書き込みでのオープニングと

趣向を凝らした。しかし、結果はご覧のとおりハズシタ。この結果最初の一時間程度は多少堅苦しい雰囲気があったものの、そこは歴史と伝統の産政塾であり、事務局が独り芝居をしたに留まりどおつてことはなかった。せっかくの機会であるから、ハズシタ企画の塾生のボードを紹介しておこう。予想外であつたが、麻雀・パチンコが複数回答の他は、読書、ドライブ、スキー、自転車、プロレス、カメラ、オートバイ、サッカ―、車、音楽、釣り、ゴルフ、旅行、酒、と重複なしの状況であつた。その後の会食ではご承知のとおり、事務局の役割は必要なく、ビールで充分に盛り上がった。ハズシタ企画はマイナス評価とならず八十五点は確保。

第二回の会合（愛知万博を考える）では、二月の寒い時期に飲食代捻出のため値切つたマイクロバスに乗り瀬戸市周辺の万博会場へ出掛けた。誘致合戦の最中でもあり、事務局の構想段階では、反対派グループとの討論をとの構想であつたが、愛知県や良識者の説得により止む無く断念し、実施したとおり、現地の案内と、愛知県と推進派議員とを招いた討論となつてしまった。主な万博推進団体から派遣されている塾生がより理解を深め、実に優等生の企画で終わった。反対グループの資料や言い分を取り寄せ、紹介し論議の素材としたが、何でもありのコンセプトに沿えずに反省。ぎりぎり八十五点。

第三回（晩学園祖父江氏）と第五回（シャンソン歌手林夏子氏）は、その人の生きざまを狙いとした。お訪ねした講師の生き方や活動について理解を求めるものではなく、事務局として賛辞を贈つてゐるものでもない。様々な生き方に触れ、討論することが狙いだ。概ね趣旨に沿つた企画であつたと考えるが、虐待問題や福祉に関して、あるいは、シャンソンという音楽に関しての興味が先行した感

があつた。まあ、大した問題ではない。八十五点は大幅にクリアした。

第四回（松下政経塾）は従来から何度も企画しているものであつた。そして、これまでの塾生の評価は分かれていた。私自身も未体験であり実施することとしたが、解散後の辻堂駅での塾生の感想を聞き意義があつたと納得した。こういった評価は大変に貴重であり充分八十五点。

第六回（中国からの留学生）は、生きざまに加え、外国人からの視点と考えた企画であつた。中国に対しての理解に塾生の濃淡があつたり、講師は予想以上に日本語が上手く、いたってまじめな中国勉強会となつた。でも八十五点。

第七回はネタ切れ、時間切れ寸前となり、デンソーの真新しい施設を旗印とした企画とした。前期の産政塾でアイシンの新しい施設を利用していただき開催した記録があり、正直言つて「こまくさ」ありきの企画であつた。第六回までの企画では、講師と塾生と討論との構図が強く、塾生相互の討論がやや欠けたとの反省に立ち、塾長を交えてどうでも良いテーマについて討論した。結果的には評価が塾生の賛否が分かれたが、「こまくさ」の施設やレストランでのメニューや楽しい会話（討論ではない）に充分満足した。各派遣団体の新しい施設を利用させていただき産政塾開催のパターンもほぼ確立でき八十五点。

八期の産政塾が終了後、塾生にアンケートを提出いただいたが、各会合の評価が見事に分かれた。そして、実際には点数評価でなかったが、八十五点から一〇〇点の評価であつたと理解している。産政塾七回皆勤賞の所氏と丹羽氏が全体を判断いただけと考え、各回の評価を更にお伺いしたが、これもバラバラな評価であつた。ちなみに、所氏のベスト企画は丹羽氏のワースト企画であつた。これ

は事務局にとって大変に有り難いことだ。あらためて「なんでもあり」を考えさせられ、今後の企画はより刺激的にと意欲を掻き立てられた。

もう一度繰り返すが、産政塾はそれぞれの講師の行動や生きざまを理解し共感しようとするものではなく、それに触れ、討論し、そのことから「殻の外」を知ることである。講師に賛同しなくても、間違っている、私はこう考える、でも産政塾は成功である。異業種交流との名目の下に参集した塾生であるが、むしろ、ほとんど同様の環境に置かれているメンバーの集まりである。殻の外は広く多様である。その幾つかを見せれば産政塾のページとなる。ゆえに、どうしたって事務局はいたって気楽であつた。

最後に、閉塾の際に同窓会の構想をご提案いただき、事務局として大変嬉しく受け止めました。この塾誌の発刊を機会に、塾生の皆さんからご要請をいただければ喜んでお手伝いさせていただきます。また、現在産政塾OBは一五〇名程度となり各方面で活躍されております。八期の塾生の皆さんの今後のご活躍をお祈りすると共に、産政塾へのご支援をお願い申し上げます。

事務局として、「これは禁止の企業文化（組合も）」に対抗して「何でもありの産政塾」として、歴史と伝統を積み重ねていきたいと考えております。

時 差

中部産政研 足達広紀

人間の「殻」は何からできているのか。その九五%（？）が慣習とか常識とか、生い立ち・体験に基づく価値観などであって、ほとんど自分そのものと言っている。だから抜け出すことはおろか、殻として感じることにすら容易ではない。多くの人は気づくこともなく殻の中で一生を過ごす。

ところが、外国に出て異文化に触れて見ると、それまで疑う余地もなかった常識が意外やそこではヒジョーシキであつたりして、「殻」を構成する断片をすこしずつ感じることになる。三十代の前半、ロスアンゼルスに駐在していた私は、しょっちゅう自分の常識が島国の日本でしか通用しないの思い知らされた。この話はほんの一例。

秘書のミセス・ケイは眼が悪いせいもあるが、大体が注意散漫でタイポ（タイプの打ちまちがい）が多くて困っていた。「又タイポだ！」私はスケジュール表を睨みながら彼女を呼び付けた。それは本社トップの訪米スケジュールで、赴任間もない私とその諸手配を受け持っていた。ユタ大学で名誉学位を受け、帰途飛行機でディーラー会議が開催されるラスベガスに移動する。「ソルトレイク発午後一時十分、ラスベガス着午後一時二十五分」とある。これは明らかに二時二十五分着の間違いだ。

「いくら隣の州でも四五百マイル（六四〇キロメートル）をたった十五分で飛べると思えますか？」私は今後のこともあるからこの際よく注意しておかねばと、お灸をすえる口調で言った。

「あの、それローカルタイムですから」 ナニ？ ローカルタイム？ 私はみるみる自分の顔が赤く

なるのがわかった。時差だ！ラスベガスのあるネバダ州と東隣りのユタ州は違うタイムゾーンにあり、ラスベガスのローカルタイムはソルトレイクより一時間遅れているのだ。ケイ女史が作ったスケジュールにはどこにも間違いはなかった。間違っていたのは、「時間」はあまねく普通の尺度という島国発想からまだ抜けきれない日本人駐在員であった。以後私はいつも自分に言い聞かせた。「アメリカでは時間がいくつもあるぞ。同じ州でも時差があるから気をつける」

その年の夏休みに、私達一家は車でアリゾナ州南部のフェニックスに出かけた。一時間走つても給油所がないような広大な荒地をひた走り、やがてコロラド川を渡ると、カリフォルニア州とアリゾナ州の州境である。ここでパシフィック・タイムゾーンからマウンテン・タイムゾーンに入る。私は抜きかりなく腕時計と車の時計を一時間進めた。グランドキャニオンなどを回つて、州内のモーテルで三泊したが、部屋の時計はどういうわけかどこも約一時間遅れているのである。最後のモーテルでチェックアウトする際、ロビーの時計を指して「遅れてるだろ？」と聞いて見た。相手は自分の腕時計と見比べて「ぴったりあつてますよ」という。私はすっかり狐につままれた気持ちであつた。

アメリカでは四月上旬から夏時間（デイライト・セイビング・タイム）に入り、一時間時計を早める。これは第二次世界大戦中の「ウオー・タイム法」を引き継いでいるものと聞いていた。ところがある。アリゾナ州とインディアナ州（一部を除く）はこれを実施していないというのだ。だから夏の間はアリゾナ州とカリフォルニア州には時差がなかったのである。同じ国で夏時間を実施する地域としない地域があるなど、日本人の常識では到底考えられない。私は依然として「時間はあまねく普遍であるべし」という島国発想から抜けきれないいたのである。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

日時：96年12月19日(木) 14:30～20:00

会場：カバハウス・ツインピークス

内容：開塾式

塾長足達広紀と討論「殻の外へ踏み出そう」

交流会



第8期産政塾に集まった22名の塾生



足達塾長の講話に続き、各塾生が自己紹介

開塾式では緊張した表情も
酒が入ればご覧のとおり→



第1回目からすっかり打ち
解けて第8期の産政塾はス
タート



《第2回会合》

日時：97年2月4日(火) 14:00～20:00

会場：瀬戸市愛知万博候補地・全トヨタ労連つどいの丘

内容：「愛知万博を考える」

愛知県商工部万博誘致対策局環境調整課長山田英道氏
万博候補地の視察と反対活動グループの内容を討論



愛知県商工部山田英道氏の案内で万博候補地を視察



万博の概要を説明する山田氏



視察後は万博の概要と反対
活動グループの内容を討論



片桐清高県議(中央)・中村
すすむ市議(右)も論議に参
加



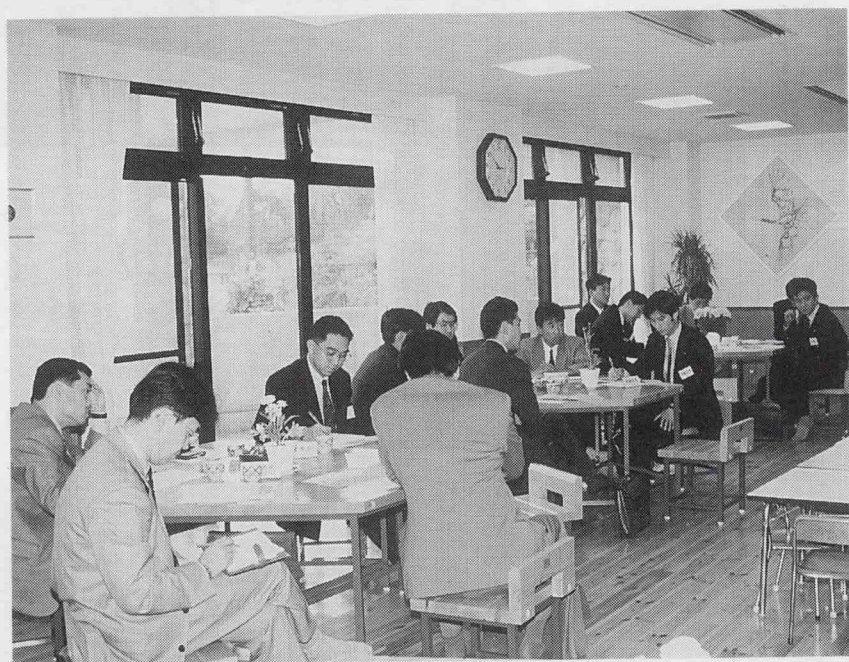
《第3回会合》

日時：97年4月21日(月) 14:30～21:00

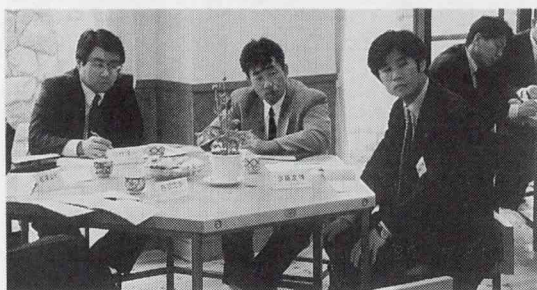
会場：養護施設「暁学園」(東海市)

内容：「子どもの虐待問題と施設の運営」

施設長祖父江文宏氏を訪ねて討論



養護施設「暁学園」を訪ね子どもの虐待問題を討論



真剣に聞き入る塾生

お訪ねした施設長の
祖父江文宏氏



祖父江氏の生き方について
も活発な論議



《第4回会合》

日時：97年5月15日(木)12:50～15日(金)11:00

会場：松下政経塾（神奈川県茅ヶ崎市）

内容：「体験入塾」

塾の概要、松下政経塾生との討論等体験入塾



松下政経塾へ1泊2日の体験入塾。松下幸之助像の前で記念写真



↑
夕食後は松下政経塾生や他の
体験入塾生と盛り上った
論議となりました →
↓



翌朝は塾内の清掃と湘南海
岸まで散歩
↙ ↓



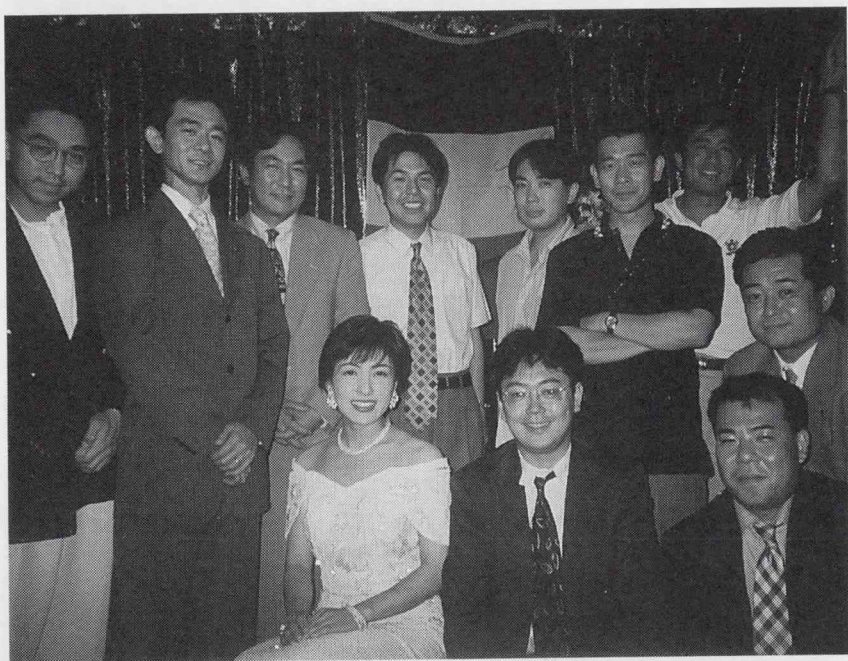
《第5回会合》

日時：97年7月14日(月) 21:00～25:00

会場：カフェ・コンセール・エルム（名古屋市ライブハウス）

内容：「シャンソンと私の人生」

シャンソン歌手林夏子氏を訪ねて



林夏子さんのライブハウスをお訪ねし、その後塾生との討論を実施
(終了は深夜1時をまわった)



↑
お酒が似合う雰囲気の
ライブハウスでの討論→



↑
終了後は塾生と記念写真を
→



《第6回会合》

日時：97年10月29日(水) 15:30～20:00

会場：トヨタ自動車(株)名古屋ビル

内容：「日本と（日本から見た）中国」

中国からの留学生を囲んで

李云峰(リウンポウ)氏、丁紅衛(テイコウエイ)氏を囲んで



中国からの留学生を囲んで、それぞれの日本感、中国感を論議



留学生から見た中国に関心
が集中

名古屋大学へ留学の李云峰
氏（右）と丁紅衛氏（左）



←
お2人を交えた懇親会で真
剣に聞き入る塾生



《第7回会合》

日時：97年11月27日(木)15:00～28日(金)8:00

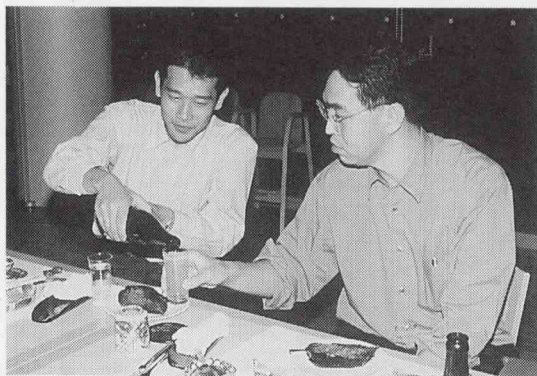
会場：デンソーリゾート治部坂「こまくさ」

内容：塾長足達廣紀と討論会、閉塾式

「女性の社会進出について」他



デンソーリゾート治部坂「こまくさ」を利用させていただき最終会を開催



産政塾OB（アイシン労組
佐宗正典氏）にもご参加い
ただき討論



最終会の懇親会は夜遅くま
で討論

産 政 塾

1998年8月27日 第1刷発行

編 集 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

愛知労済豊田会館 3F

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

産政塾

塾長 足達 廣紀

塾生

中部電力労組	有賀 文昭
トヨタ車体(株)	伊藤 賢一
松坂屋労組	伊藤 友博
名古屋鉄道(株)	岩城 史憲
全トヨタ労連	植松 良太
豊田市役所	粕谷 浩二
豊田工機労組	川村 淳一
(株)東海理化	栗栖 秀人
中部電力(株)	佐野 弘忠
アイシン労組	杉浦 公紀
(株)デンソー	中條 喜之
関東自動車工業(株)	所 秀樹
豊田合成(株)	丹羽 広志
トヨタ自動車(株)	根本 恵司
デンソー労組	服部 健司
(株)松坂屋	早川 範一
(株)東海銀行	廣瀬 登
アラコ(株)	船戸 正巳
丸栄労組	前田 孝広
トヨタ車体労組	前田 直人
トヨタ自動車労組	百瀬 和典
アイシン精機(株)	森本 浩二

(財)中部産政研 丹羽 研次